上

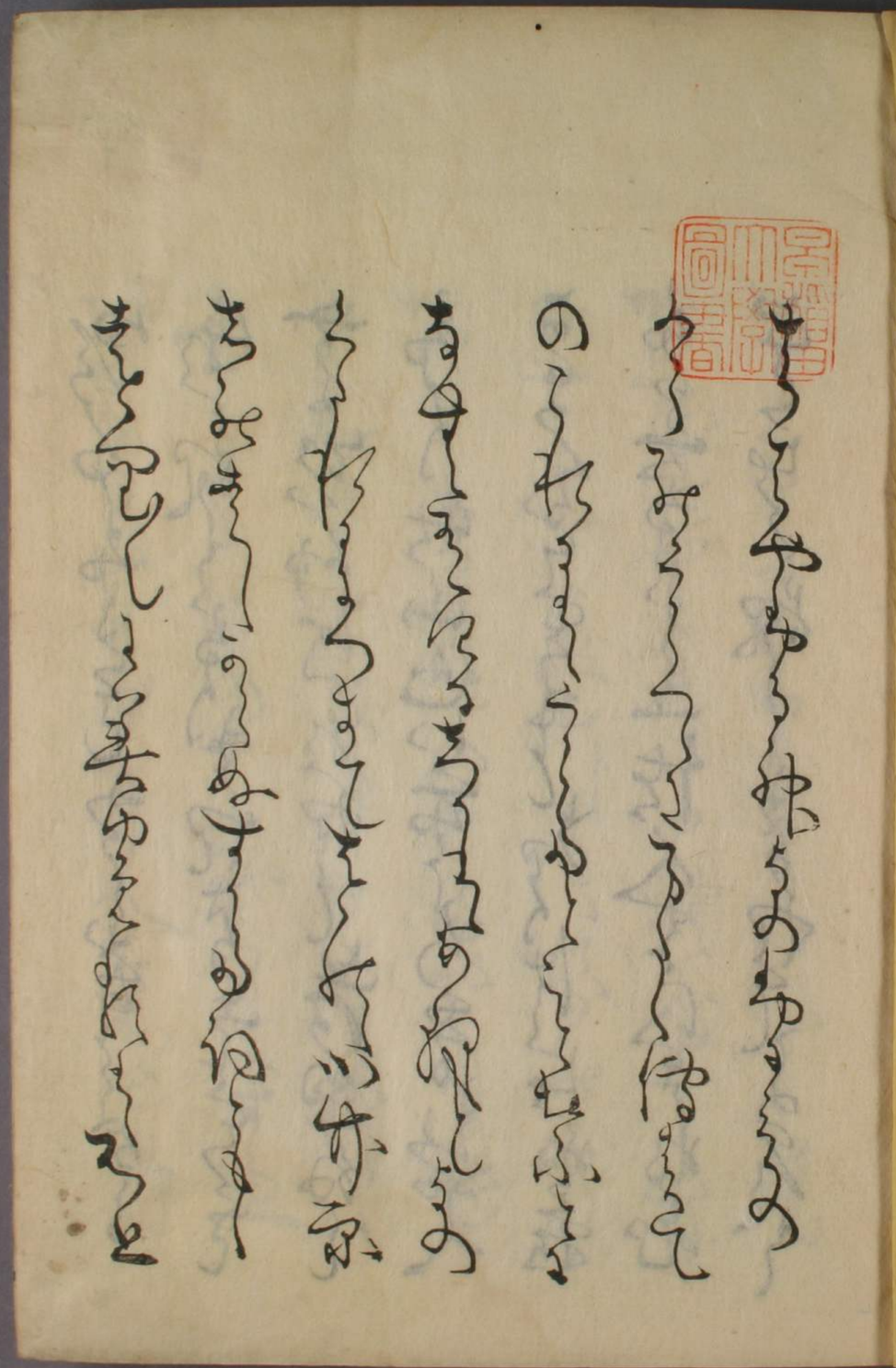
ホ 2
4303
1

H.2
4303
1-3

鈴木重胤大人著
佐々木春夫大人校
祠のもうでの書肆

千鐘房
尚古堂
群玉堂

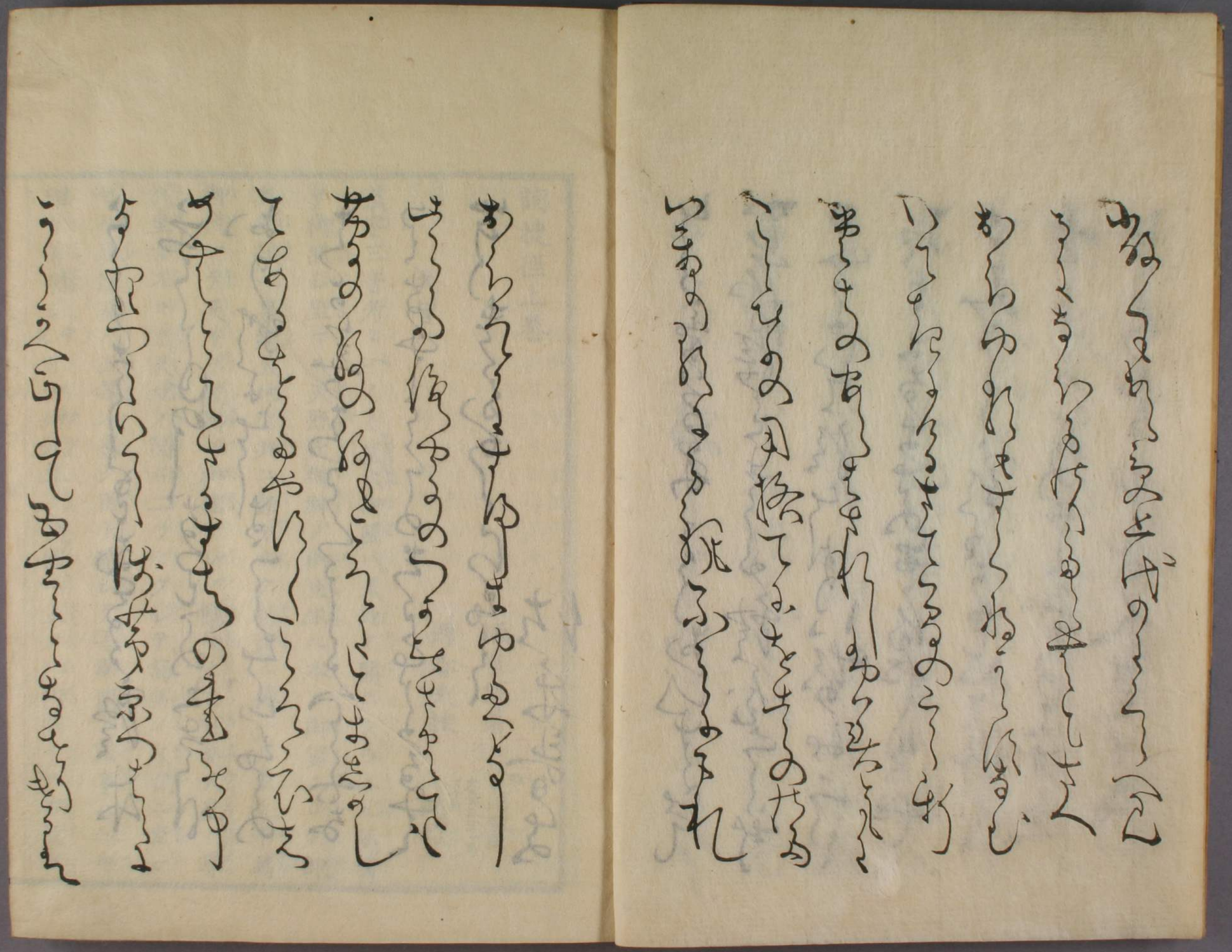
60



門 ホ
號 4303
巻 1

野中のふるしみつをたつねて[illegible]
あきのかせにきえたるあとをも
たつねわひてはなをおしみし
夢の世の山路にまよひつゝ人
うちかへしてもなほはこかれ[illegible]
わか身[illegible]上陽人もいさかれぬ
早[illegible]しか[illegible]

[illegible]おもひすてし
かの桐[illegible]
の[illegible]
[illegible]まよひ[illegible]
[illegible]
[illegible]のちの世[illegible]
[illegible]しの人[illegible]



詞捷徑上巻

大旨

源重儁著
源春夫校

故先光清風氏
大正三年十月三十日
先光華氏寄贈

漢字三音考よいとく。皇大御國ハ。天地ノ間ニアラユル萬國ヲ御照シ坐マス。天照大御神ノ御生坐ル本ツ御國ニシテ。即其御後ノ皇統。天地ト共ニ動キナク無窮ニ傳ハリ坐テ。千萬御代マデ天下ヲ統御ス御國ナレバ。懸マク乇可畏天皇ノ尊ク坐マスコト。天地ノ間ニ二ツナクシテ。萬國ノ大君ニ坐マセバ。異國國ノ王等ハ。悉ク臣ト稱ジテ。吾御國ニ服事ルベキ理リ著明シ。中暑サテ如此尊ク萬國ニ上タル御國ナルガ故ニ。

方位モ萬國ノ初ニ居テ。人身ノ元首ノ如ク。萬ノ物ノ事モ。皆勝レテ美キ中ニ。殊ニ人ノ聲音言語ノ正シク美タキコト。亦愛ニ萬國ニ優テ。其音清朗ト清クアザヤカニシテ。譬ヘバイトヨク晴タ九天ヲ日中ニ仰ギ瞻ルガ如ク。イサヽカモ曇リ無ク。又單直ニシテ迂曲シル事無クシテ。同書小「外國人ノ音ハ。凡テ朦朧ト渾濁リテ。譬ヘバ曇リ日ノタ暮ノ天ヲ瞻ルガ如シ」と有る小對へられたり。眞ニ天地間ノ純粹正雅ノ音ナリ」といとれる。此ハ古語ハ言靈能佐吉播布國。まさ事靈之所佐國。この二つは言の心ハ。皇大御國は言語ハ。實ハ天地開れ純粹正雅の音ゝて。言ごとハ無盡の意と含畜せるふるゞ。其用法ハれのづからいと嚴そっかろ定格有て。称呼とふてハよく事物の本義とはらハし。轉り用らてハ進退作用の言とふて。或ハその形狀とかさる言とふて。そもゝ彼我反對の條理ハて。まさ係辭とふてハ連れたる意味の淺深とわろち。助辭とふてハ言外はこゝろ用ひと知らしめ。或ハ禁止の辞とふて。指揮の辞とふて。結辞とふてハ上よて言ひ下れ。叀の意と別ちて。疑。治定。過去。現在。未來とゝきためふどゝ。とも奇〻妙ふるよしとかさる古語ふて。心とつけてといつる言はこゝろと熟く得られさる思辨ふべくふむ。

説ゝて甚も尊くふむ有ける。然ゝどもこは言靈は妙用世ゝかくきてふむ有けるゝ。本居大人は如此く見顯ハし出給てかく言舉せらきたるふむ。千萬年は前ふも後ふも比類罕ふる功績ゝハ有ける。ゝの書つさへられさる。古事記。傳。漢字三音考。字音音假字用格。詞の玉は緒ふどゝくゝ中ゝそはてゝろ明せられさる事ゞ是とゝして。何くきは書は中たきも知きる事ふてつぎて。ハ鈴木朗が言語四種論いとよし。後鈴屋翁の詞八衢。詞通路ふどゞ目さむるぐゝをめでさきふゝふてける。此書世ゝハいでゝよて天下ふやうゝ活言の方ゝ心と用ふる輩ふハいとゝ多く出來ゝさめるゝとも。ゝゝいゞきいさをふてけて。まさかざゝ抄ハもひ抄も。此ゝふらべ

て必見るべき書ふて。然るに善事と惡事い繼ぐ世は理はすべもなきかも。此大人の精說と竊しふぐら。聊は過と見出てい。我たけく得たてげに。此よて彼よて何くもは書どもと著し出て。煩はしきまで多らるい。此豆爾袁波はふミどもて其弊よて今ハ事實と徵し明らむる學問い傍は物となりて。豆爾袁波はすぢよのミかぢつらひて。生涯は力と用ふる人ぞ多らめる。いらふ口をしき事もしずやこもよて此捷徑いつくれるなり。此書おのぐ家說と立ぐ。言語は條理とつけて見得る事等と輯ゑ。それと今按とも記し添て。初山踏のたをりとて。物しるふて。

音韻

同書ふいとくサテ其古言は正音ハタぐ四十七ニシテ。ヤノ行ノイエト。ワノ行ノウヲ加フレバ。都テ五十ナリ。此イエウノ三音ノ各ニツアルヿ所以アリ。ニツカト思ヘバ一ツ。一ツカト思ヘバニツニシテ。一ツトモニツトモ云ガタシ。此妙處ハアヤワ三行ノ音ノ分レタルユエヲヨクヿ解セバ。オノヅカラ明ラカナルベシ。是ニカノ行サノ行タノ行ハノ行ノ濁音。合セテ二十ヲ加フレバ都テ七十ナレドモ。濁音ハタぐ清音ノ變ニシテ。モトヨリ別ナル者ニ非ル故ニ。皇國ノ正音ニハ。是ヲ別ニハ立ズ。清音ニ攝スルモノナリ。一音ノ言ニ濁ル例ナク。又ニ音三音ヲ合セタル言ニモ。首ヲ濁ル例ナシ。凡テ濁ハタぐ其中下ニノミアリ。然ルニ上ヘ佗ノ言ヲ連ネテ合セイフトキハ首ヲモ濁ル事多。月ヲモ望月ナドト云トキハ。ツヲ濁リ。川ヲモ谷川ナドく云トキハカヲ濁ル

ガ如シ。此例ヲ以テ見レバ。一言ノウチノ中下ニ濁アルモノモ。其本ハ二言ノ連合セルモノナラムカ。其意得ヤスキモノヲ一ツニツ例ニイハヾ。祖父祖母ハ大父大母ノ義。柳ハ箭之木。窓ハ間戸。袖ハ衣手。筆ハ文手。札ハ文板ニテ。皆二言ノ一言ニナレルニテ。濁音ハ何レモ連聲ノ便ナリ。然レバ此餘ノ。義ノ知ガタキ濁音モ皆此類ナルベキカ。○まづ古史徴ヨリ。古語ノ濁音の希少なる由ハ。まづ今ハ誰も濁音と思ひ定めたる語書ふも多く濁音の假字と書き。今も大うさは人ハ濁アて伝めもど。語の原と思へバ。始ハ端。繼ハ付。水ハ滿と通やきバ。原ハ共ニ清音ニて濁るハ中ニ後ふて此ハ此一ツニツニ限らバ。長ハ中。正ハ立。氏ハ内ふる類ひ。凡て濁音ニいふ萬語の解がされハ清音ニふと悟ら考ふきバ。十ニ六ツ七ツハ速ニ解えこと。前ニふと悟ヲ得て。人ニも彼此語アて驗ニめたる小誰も實然ことふおアと云へアと。といれさるふんげふさる事ニて。古言と解くものゝ規則とすべき至言なる。サテ其五十ノ音ハ。縱ニ五ツ横ニ十ヅゝ相連リテ。各縱横音韻調ヒテ亂ルゝコトナク。其音清朗ナルガ故ニ。イサゝカモ相

渉リ紛ラハシキ事モナク。○縱とハアイウエオは順といひ。横とハアカサタナハマヤラワの列といへア。所謂五十連音韻圖こまをアさて此五十連音韻圖ハ。いつれ世ニ誰がつくアしといふ事。古書ニ所見ふし。鈴屋翁ハ說ニ此ハ。悉曇字母ニ依アて其學れ爲ニつくまるもれふもいらバ。然まども皇國れ語音れ爲ニつくまるもれふ非バ。まさ皇國れ語音れ爲ニつくまるもれふ非バ。まさ皇國の正音ニしてさらニ彼國とうつし取まるふいらバ。ふ古言と以て知べきふア。といれされど重亂ら心ハ然らバ。悉曇字母ニ似たるハ我ヨア皇國れもれふるぢかこふも傳アたるニて。おのづらア。これ故ニ印度れ音韻。此五十連音ニ彼ヨア我ニ似さるふア。これ言語れさめニハ。此ニて有餘不足ふて數行ぬも有ご皇國れ言語れさめんらアける。如此く天地間の正音ふるふよア。太古よアふ誰ら言ふともふく自然ニ傳ハアたるるぢ。文字と以て事ア誰ら記れ世ともふアてれ後ニ。次第て見ばこれ五十連音韻圖とハふアふ。其證ハ一言のうへニ用きとふバニアイウエオ。カキクケコふどれ順ニ依らざきバ。ろれ用とくれからぬニても知べし。そるうニ後世ニまらて。天下れ言語の更ニ轉涸き出ん梵文れわさる時節とま

もけとしハ。ふつゝ一ノ音ニ平上去ノ三聲ヲ具シテ。言ニ
思ひよらずゐん。
隨テ轉用ス○重儀云皇國ハ語言ハ。たゞ平上去の三ツのミ
ふ。俤離鈌古ハ音聲言語と見ゐを聞ゐをて其方ざまのこ
とゞひハ爲れども。此方はことバゝハゐる事ゐをなり。
ハ同書ゝ先皇國ノ言語ノ法。連用ノ便ニ隨テ。同言モ三聲平上
去轉變スルコトニテ。其轉變ニ依テ義ノ種〻ニ分ルゝコト
アリ。日ハ平聲。樋ハ上聲。火ハ去聲ナルヲ。日影ト云トキノ日
ハ上聲。掛樋ト云トキノ樋ハ去聲。火箸ト云トキノ火ハ
上聲トナリ。山ハ平聲ナルヲ。山風山松ナドゝ云トキハ去聲
トナリ。東山西山ト云トキハ上聲ニナリ。宇治ハ去聲ナルヲ。
宇治川トイヘバ上聲。宇治橋トイヘバ平聲ニナル如ク。何し
ノ言モ皆其聲轉スルヲ。若本音ノマヽニ呼ブトキハ。其義異
ナリ。カノ山風山松ノ如キ山ヲ本音ノマヽニ平聲ニ呼べバ。
山ト風トニツノコトニナリ。山ト松トニツノコトニナルヲ。
轉ジテ去聲ニ呼ブニヨリテ。山ノ風山ノ松ノコトニナルガ
ゴトシ。サテ山ハヤトマトノ二音。川ハカトハトノ二音ニテ。

コレヲ一音ヅヽ分テ各四聲ヲ云トキハ。ヤハ上聲マハ平聲。
カハ上聲ハハ平聲ナリ。然レドモ又ヤマトモカハトモ連リ
タル言ノウヘニ平上去アリテ。山モ川モ平聲ナリ。東南ナド
三音四音連リタル言モ。皆同ジコトナリ。然ルヲソノ連ナリ
タル音ヲ。一〻分テ平上去ヲ定メムトスルトキハ。紛ラハシ
クシテ分明ナラズ。是言ノ内ノ音ハ。親シク連接タルガユ
エナリ。サレバコレヲツラネテ言ノウヘニテ定ムルトキハ。三聲分明ナリ。又五十ニシテ足ザル
音モナク餘レル音モナキユエニ。一ツモ除クコト能ハズ。亦
一ツモ添ルコトアタハズ。凡ソ人ノ正音ハ此ニ全備セリ。つぎ
ハ文字。サレバ此五十ノ外ハ。ミナ鳥獸萬物ノ聲ニ近キモノ
ニシテ。溷雜不正ノ音ナリト知ベシ。相對ヘていなれさて。
とはて。さて其正音は全備せるもは。詞の正こちは依るふ。い
く文字を約めて出せて。世は音韻家たちうの悉曇。まさ韻鏡。鶏
珀設ゝよて。ていふ說ども。ハ甚うけげさかて。ぴとて此とき
ごとゞいひえさると。おかゆもべいぎせて。古今萬國といそび音韻はもとハヒ

フヘホおあ。其證ハ口を開き喉よあ眞すぐゑ息を出せバ輕
くハ――と鳴る。息のおのづから口中へはくふきひゞく聲おあ。又唇と開き寛
げ齒を合せて息を出せバ自然かろくヒ――と鳴る。息の齒ゑ
ふきロ中へひゞくこゑおあ。うきふ反ーて唇と合せ窄め齒を開きて息と
出せバ輕くフ――と鳴る。息はおのづから唇へふきひゞくこゑおあ。又さらゑ
舌を下腭へおーつけーひて息をいざせバおはづから輕く
へ――と鳴る。息の内腭より下腭へ觸きひゞくこゑおあ。こゑゑ反ーてロひる
と窄め口中をふくらめて上腭へむけて息を出せバおのづ
ら輕くホ――と鳴る。息の上腭へふき口中へひゞくこゑおあ。是を音ゑお
ゐーてたーうゑ言へバ。喉音はハヒフヘホおあ。又今すこー

たーうふいへバ。半喉半唇はハヒフヘホおあ。此音を長く介
ニーフーヘーホーと呼べバうは韻よあアイウエオを出はこれ
音ゑ（字音假名用格又或説ゑ倣）イを重ねうけてアイウエオと呼べバヤ
レユヒヨとおあ。ウを重ねうけてウウウウウエオと呼べバワ井
ウエヲとおあ。まゑエをかさねうけてエエエエエアイウエオと呼べバ
ヤレユヒヨとおあ。オを重ねうけてオオオオオアイウエオと呼べバア
イウエオゑ帰るなあ（字音假字用格ゑ「喉」音三行ハわいうえれ）
一ツナリ。サテ一ツニシテ三ツニ分レタル所以ハ。わいうえれノ音ニシテツノ本ハ
五ツノ音ヲ重ヌレバ。自然トをノ音トナルユヱニ別ニあいうえれノ音ノ重ナ
ニあいうえれノ音ノ重ナリタル言ハ一ツモアルコトナシ
と見えさあまさ「喉」音ニノミ此差別アリテ。餘ノかさたはな
まらノ七行ニハ是無キハイカニトイフニ。マヅや行わ行ノ

音ハモト二音ヅヽカサナリタルモノナレバ。實ハイハユル拗音ナリ。然レドモ喉音ハ餘音ニ類セズ。柔輭隱微ナルユエニ二音ヅヽ重ナレドモ。オノヅカラツヾマリテ直音ノ如クナルユエニ。此ニ行ノ音トナルナリ。餘ノセ行ハ二音ヲ重ヌルトキハ。サダカニ拗音ニシテ一音ニワヾマルコトナシ。故ニ喉音ノ外ハミナ單行ナルナリとも見えさア合せ考べ。これヽ依テ思へべ。ハヒフヘホハアイウエオと引出ス爲ニ導音ヽて。アイウエオハ諸音とすぶる統韻ふア。ヤレユヒヨワ井ヲエヲハ變化とふすためれ重音ヽなるのアける。○字音假名用格ヽ韻學家ニ喉音ヲ論ゼルコトアレドモ。皆古言ニ昧クシテ。三行ノ最然トシテ。相混ズヾジキ義ヲ知ラザルユエニ。皆混雜シテ。や行わ行ハ畢竟無用ノ長物ノ如シ。といとれさる然る事ふア。ついてヽいふ「ヤレユヒヨハ舌頭ヽていふべ〳〵。ワ井ヲエヲハ唇と合せていふべ。さて口と箝ミ內腭よ〳〵。と詞れ正ミちヽ〳〵るせア隨ふべ。アを鼻へかけて息と出せバ。おのづらク。と鳴る。このクとワ井ヲエヲふ重ねらけて。クワ井ウエヲと呼べバおのづらカキクケコとるこも。これハ不熟音ふア圓熟〳〵て正音ハカクケコとふる。クい下腭とうさん爲ヽ。まづ鼻ヽアを歸入する音ふア。これも鼻ヽをちとうてて下腭ヽいさるふア。唇と齒とと合せて。すこ〳〵閉きて息と出せバ。スーーーーーと鳴る。これスーーーーーとワ井ヲエヲヽ重ねらけて。スワ井ウエヲと呼べバおのづらサシスセソとるこも。こきハ不熟音ふア。圓熟〳〵て正音のサシスセソとふる。舌頭ヽて上齦と（ウハグキ）うち急ヽ音と出せバ。テッと鳴る。これテッとヤレユヒヨヽかさねらけて。テテテテテテヤレユヒヨと呼べバおのづらタチツテトとるこも。此い不熟音ふア。圓熟〳〵て正音のタチツテトとふる。古來

タチツテトと舌音といへるハ由ふし。諸音舌と以てあやどらざるハふし。さきバ舌音と云へバ。諸音ミな舌音ふア。その觸るゝところと以て名目とたつべし。口とつぐミ上齶へかろく鼻へかけて息と出せバ。ものづらヌと鳴る。これヌとワ井ヲエヲは重ねて。ヌヌヌヌヌ ワ井ヲエヲと呼べバ。おけづらヒ。ナニヌネノときこゆ。こゝハ不熟音ふア。圓熟して正音のナニヌネノとなるゆゑハ帶鼻音ふア。鼻とつよくはさミてナニヌネノと呼べバタチツテトとなる。これなほてナニヌネノハ帶鼻音ふることとなる。口とつぐミ唇とじて鼻へ息とおてゝ音と出せバムーと鳴る。これムーとワ井ヲエヲは重ねてムムムムワ井ウエヲと呼べバ。おけづらマミムメモとなる。是も帶鼻音ふア。鼻とつよくはさミてマミムメモと呼べバおけづらハヒフヘホとなる。これなほてマミムメモハ帶鼻音ふる

こととなる。○重亂云同書ハ「五十連音韻圖」ハ。うの排列ハ悉曇章ハふらへるもれもがうア。イウエオハ順ハよろし。アカサタナハマヤラワハ順ハ。いさゝか違へアと見ゆるハ依ア。今ハられめてアカサタワハマナラヤとす」とおもどろハ精考と知らざるバ。容易くハられ免ゲゝかア。こもふよア此書ハ引用ふる件ハ本書ハ次第とハ異ふア。見む人ハやゝむ事ふら

舌頭ハて上腭とうち急ハ息と出せバレッと鳴る。これレとヤレユレヨふかさ孫て。ヤレユレヨと呼べバ。おけづらラリルレロとなこゆ。こゝハ不熟音ふア。圓熟して正音ハラリルレロとふるといとれハとアよくくつぎふ記せる。五十連音韻圖ふ合せ見て悟るべし。さて圖ハ上層ハにげるハ。右ハいへる音韻の所生ふア。下層ハ志るせるハ。其行の音韻のこゝろふア。さて阿行の下ハ廣厚といへるハ。うハ行の言ひ

ろくおほさおる意おきびおア。加行の下ゑ堅牢(ケンラウ)と志るせる
ハ。ろれ行の言かゝき意おもバるア。佐行の下ゑ窄小(サクセウ)と志る

五十連音韻圖

				統韻	喉音 舌本
					下腭 齦音
					下齦 齒音
					上齦 彈音
					帶鼻 上齦
ナ	タ(ダ)	サ(ザ)	カ(ガ)	ア	
ニ	チ(ヂ)	シ(ジ)	キ(ギ)	イ	
ヌ	ツ(ヅ)	ス(ズ)	ク(グ)	ウ	
ネ	テ(デ)	セ(セ)	ケ(ゲ)	エ	
ノ	ト(ド)	ソ(ゾ)	コ(ゴ)	オ	
和順	剛直	窄小	堅牢	廣厚	

				導音	半喉 半唇
					帶鼻 唇音
				重音	喉音 舌頭
					上腭 彈音
				重音	微彈 唇音
					半咽 半齒
ハ(バ)	ヒ(ビ)	フ(ブ)	ヘ(ベ)	ホ(ボ)	變更
マ	ミ	ム	メ	モ	渾融
ヤ	レ	ユ	ベ	ヨ	進前
ラ	リ	ル	レ	ロ	形狀
ワ	井	ゆ	エ	ヲ	揉曲
蕃	辰	ゆ	下腭	上腭	大言 蔑言

せるハ。其行の言せバくちひされ意おもバるア。多行の下ゑ
剛直(ガウチヨク)と志るせるハ。其行の言剛(ガウ)くつよれ意おもバるア。奈行

は下ゝ和順と志るせるハ。其行は言柔くやいらゝかふる意ふきびかゑ。波行の下ゝ變更と志るせるハ。其行の言變ゑ更る意ふきバなゑ。麻行の下ゝ渾融と志るせるハ。其行の言物とすべ圓むる意ふれバなゑ。夜行の下ゝ進前と志るせるハ。其行の言すゝゝゆくこゝろふきバなゑ。良行は下ゝ形狀と志るせるハ。此行ハ諸は言の下ゝようひて。其こゝろ有入居ふどはびとく體用は言の形狀を表し意を達す言在バなゑ。和行の下ゝ樅曲と志るせるハ。其行の言ふよゝふる意ふれバなゑ。これらはおもぶきとよく明らめふバ。自然音韻は靈妙ふむいちじるくしらるゝのふる。

體言

詞ハ衢といふうまし書世ゝ出しよゑ。ろは恩賴と蒙ふゑて。用言は方ゝハふうく心と用ひて。どかう云めきどこは體言はゝハおのづゝらふる物ふして。ろは定格ふる事ゝ心づけるさまふも見えざるゑ。余とゝごろ此事と。ゝらバ口をゝふもひつさるふつけて。語彙といふ書と著述して。流布さゞやは心ゝもども。ろハ天下は言語とことゝく彙むるゝざふきバ。とゝふ竟べくもゝらびふんふる。此語彙ハ鈴屋翁の玉意と得て古史微ゝ古今の言語を彙めんとろは下かさへさへゝふゝゑ。いとも止事ふき大業ふれゝよゑ。得物しつるふゑ。其書の大旨ハ體言用言はかぎゑと五十連音の次

第ニはげ。其徴を詳ニし其義を釋せきばいとも〳〵容易からぬわざなるニよりて。ろき出来るまでニハこゝらは年とやへぬらむ。ろ〳〵いうでカを戮せてこはわざと相たすけおれ人もゲな。此ついでニハいさゝかうれ定格といそんニ。體言といふもは種〳〵小別きて。一ニハ有形體言。二ニハ無形體言。三ニハ用語體言。四ニハ用略體言。五ニハ二合體言。三合四合も此例也。おどすべて五種なり。ろハさ〳〵も要なさか似さまどもこは差別と熟く知らでハ。ことゞとえをわくることと難く又條理無けきバ。いさゝかおどろすなり。○有形體言とハあめつち。天地。日。月。山。川。草。木ひつきやまかハくさきなどのだとくかさちなる稱呼なり。○無形體言とハとしつきひと年。月。日。時春。夏。秋。冬さとるなつなさふゆなど。形なきものゝ名目なり。○用語體言とハうさひ。波行四段用言。やどり。宿良行四段用言。たぎち。瀧多行四段用言。くもり。雲良行四用言。おどはおとく。用言は第二段なる。續用言といひすゑてろれと物の名とハもしたるなり。○用略體言とハうさ。歌波行四段用言。やど。宿良行四段用言。たぎ。瀧多行四段用言。くも。雲良行四段用言。おどは如く。用言は第二段なる。續用言はそぶりをて一ッは言とおきるなり。○二合體言とハ。體言と二つ合せたるなり。譬へバ天と地とと二つ合せてあめつちといひ。日と月とと二ッ合せてひつきといひ。山と川とと二つ合せてやまがといひ。草と木と二つ合せてくさきといふが如し。まさ同例ニて。つり。釣船ふ。于浮得糸。ひがさ。え物。爲業もは。ーニさ。おどはごとく用語體言と上ニおこて。他の體言

と下ゑつら孫合せたるなり。こまらつる船ひる瀉うる物す
つゞけて用をふれとゝ別ゑて。一度續用言と言ひすゑて。體
言とふしさるゝと。他の體言は上ゑ置るゑて。類ひ多らるもみ
の中ゑて。ゞてわうちてこゝとゝ其物とさしていふと又うれ
さゑ。體言と二つ合せさるゝなて。上ゑるゝと同例ゑて。
ふ反して。やまず山住。まとる圓居。かさてひ庁戀。ふゆ冬。かきゑ枯。ゑどみ類ひ。他
み體言み下ゑ。用語體言とつら孫合せたるなり。これも上の
用をゑすとゝ異ゑて。うれ體をまさうさうら歌占笑窪。ごとくその
かさる詞ゑもバ等しきゑこ。ゑくはゑどみ
如く。用略體言み二つ合ひて言とゑきるなり。いづきも下ゑ
る言とむ孫とする時のことゑて。中間ゑのもゞと置てつゞ
けたると同ゞ。餘い准ナゾらへ知るべし。三合四合もゑ此例ゑて。さてかく
連孫合せさる言と合語ともいへて。こきゑ六の格ゑむ。

う み一ゑハ第四音と第一音ゑ轉ゞて。加行さけ酒槽とさうぶ酒槽孫。
佐風行かぜ風早とかざそや風早多手行て枕手たまくら枕奈行いね稲田といゑだ稲田。
波苗行ゑへ代とゑハしろ苗代麻目行め輪目とまぶち。夜行ひえ冷風とひやうぜ冷風
良枯行かき荻とからを枯荻。和聲行こゑ大とこわだ大聲ゑどゑ。加佐多奈波
麻夜良和み九行ともゑうて。但阿行のゝハ此例ゑ
さるハ阿行の音いづきみ言み下ゑもつうぬ音ゑきバゑて此例いと多ゑて。
て五十連音み中ゑ。阿行み音の下ゑ附うざると。良行の音み
上ゑ居らざると。いづ其二ゑハ第二音と第三音ふうつ。
こもうみでうなう。
加月瓊行つき夜とつくよ月夜瓊に矛とぬほこ瓊矛麻神行かみ風とかむかぜ神風ゑどゑ
いふたぐひうて。此例ゑかうべし。其三ゑハ第二音と第四音ふうつ
して。多カ行たち帶とたてい帶カさゑどいへるなり。此例ゑかうべし。其四ゑ

ハ第二音と第五音ふうつして。加行きは間とこはま。木間奈行に荷前と
のさた。波火行ひ串をぐし。夜行おい繋およかけ老繋おどい老繋いるう
ア。此例おか行るべし。其六ユハ第五音と第一音ふうつして。良行ろ白山
とろやま白山おどいるう行ア。此例おか行るべし。かくは如く定まる
格うアて。ろは連アつぐく所はさまふ依アて。然うつろハで
いえうらぬわざおるハ。如何イカニといふユ通略延約辨ユ。「かくは
だとく音と轉じて合するハ。下は詞の意おもく。上は詞の意
かろき時は事おア」といそれたるユてよく通キコえたアずべて
は言コトハ語かくはだとく規則リとたてく足きバ。其條理スジきハやう
ユえわうるゝもはおアふ。

用言

用言とハ上おる體言ふ對カへていふ名おア。轉ウツアもさらくふ
よアて活言ともいふふア。本居春庭翁の説ユ。「詞の用ハイう
ふとも言ひ知らぬ。いとも〳〵奇クスしく妙タヘふるものふして。一
つ詞コトバもその用法ツカヒザマふよアて事かハア。たちさふ隨ヒツ〳〵意コロ
も異コトユ聞キコえふどして千チヅは事コトを言イひ分ワカち萬ヨロズのさまを語カタア
別ワカつよ。いさゝうも紛ミギるゝ事コトふく。又見る物きく物。人の心ユ
おゝこめさる思オモひの隈クマぐ。すべて世中ユはアとゝ有ることと
いく千萬チヨロズの事おアとも。言盡イヒツくしまふ紛びやらむユ。足タラハぬ事ふ
くはうぬ事ふさい。此えさらさふ依るとさふふむ有アける。

さらい神代よりて。自然定格ありて。今世ふいさるまで轉て變る事ふく。少も違い誤るときハ。その事さらゝ。其意通え難き物ふー有バ。一字と雖も猥りかそぶさ猥りさ加へふど。すべて大凡ふすべきものまハ非ゞといそさて。かきその詞ハ衢と本ふー てふは佗人くれ考得さる事どもともことゞとくふ取纂めこもと校合せこもと訂正して此圖ハ製作もて。さてその用言一ミ云活言れ大綱すべて六種ありて。いそゆる四段活言。一段活言。中二段活言下二段活言。變格活言。形狀活言。ふど名目せる此ふて。詞ハ衢ふ「こきられ名もとよりあるふ非ざもとも。事と別ち言ハむふ。名目ふくてい便用らしけを

バ今かてふつけさるなり。下すべて此名もていへて」とあるよりてもろくれ名目ハその書ふとてふはものがとくろと定免れるも多うて。其條ふ言ふと見て知るべし。

○詞ハ衢ふ云く。「四段活とハかきくけさしすせとやうふ。第一音よりて四音までつぎ〳〵四段ふ。いかんあきらくわけれさんおーもすもせもど活くといふふて。此活言かぞてふくいと多し」。

○同書ふ云く。「段活とハきさるされふれるふきもど。第二音一段のみふて活くといふ。きるきれ。れるれ。きのるきハ言とろ〳〵く活用とふせるふて。其行の音ふいかゝハらざるふ

ア。さて此活すべて一音ヨテきにふどいふよヲ外ふけきバ。
此活言いとすくふ〜。取意
○同書ふ云「中二段活とハさくくるくきちつなるつきと第二
音三音ヨテ。れさもくれくるもくきもちれつふつるれつき
ふど活くといふふヲ。くるくきつるつきふどれるきハ。一段
活のところよいへるが如し。此活言も多からず」取意
○同書ヨ云く。下二段活とハ。えううるうきけくくるくきと。
第三音と四音との二段ヨテ。えううるうきけくくるくれふ
どそさらくといへヲ。うるうれぐるくれのるきい一段活の
下ヨ云るが如し。此活言のそもいと多し。取意

○變格活言とい上ふる四種活言とハ。大同小異ヨテいづき
れ活言ふも屬ぬ一種ゐるとかヲふ變格とハ名づけさるふ
ヲ。加行ヨこきくくるくれ。中二段活言ふ大同小異ヨテ。佐行
ふせしすするすれ。下二段活言ふ大同小異ヨテ。奈行ヨるれ
ぬぬるぬれ。四段活言と下二段活言とハ。良行ふらりるき
四段活言と大同小異ヨテ。有居の二言
のみ。斷落言とりといふのみ小異ヨテ。
○形狀活言とい。上ふる五種活言ハことごく。進退作用の
言ふふ對てくしきけれしくしきけきけくけけけき
けくきと。凡て物の形狀といへる言ふふよヲ名づけさヲ。
さてそのくしきけきの行と。かヲヨ久活言といひくしき

さ志けきの行とかゝ小志久活言といひ。けくけ〜けきけ〜
きの行とかゝ小祁久活言といへゝ。然きども本義といへば。
形狀とさす言ふるを以て形狀活言と号けて。此一統の活言
は名目とせるなり。

○上の六種活言のくさ〳〵と。五段に分ちて。第一段と將
然言といひ。第二段と續用言といひ。第三段と絶定言といひ。
第四段と續體言といひ。第五段と既然言といへり。

○將然言といふこの段の言。將に然らんとする意にて既然言
にあひむかひたる言なり。いさゝかその差別といとゞ。たゞと
へば同じゞと受る辞にても。將然言と既然言とはそのうく

る意かたにてこゝよりいらだれさゞとうくきば。なりゆき
とまへよりながふ意ふるゝと。既然言よりいけば。おせゞと
うくきば。後よりまへはなりゆきといふ事にふりて。大には
ちがひる事。唱へあらはしてさとるべきなり。漢字三音考に
「第一音ハ未然ラザルニ用」といふきどゝらば。

○續用言とは。漢字三音考に「第二音ハ方ニ然ルヲ下ヘイヒ
オクルニ用」といふなりよりてふづけさせる人ハ連用言と
いへり續と字義まさく同じく用ひ來りたれども。其つゞけざ
まこゝにハ連よりて續のかさりふへるやうにおぼゆきば。今
はおのゞこゝろと思定めて。續用言とふづけたるなり。さて

續用言といふ。此段の言を唱へ試みるに。何やらいひさしたる如きこゝちもするかよをて。下に用言とそふもバ。その事達るふをいさゝか事はついでに。續用言。絶定言。續體言のけぢめといもぐ。たとへバ同じ下二段活の。ふがるといふ言も。拾遺ふ「音ふゝの川とゞつひにふがれいづる。言ハでものもふ人のふもぐ」。こもハこゝは續用言に用ひさるふを。また古今に「立田川もみち葉ふがる。神ぶびの御室は山ふゝぐもふるらし」。といるハ絶定言に用ひてきることバふを。また後撰に。「もみぢ葉のふがるゝ秋ハ川ごとに。錦洗ふと人やみるらん」。といるハ。續體言に用ひさるをて。秋といふ體言へ續けたるゞごとくいゝ千萬の言語にても。此格ふもるゝ事ふし。また此言といひすゝれゞ體言となるふを。上ふる體言の條に用語體言また用略體言ふどいへるハ則これふを。

○絶定言といふ。漢字三音考に。「第三音ハ方ニ然ル ヲイヒサダムル二用」とあを門人某ゞ説に絶ハ截斷の義ふを。定ハ字書に安也決也又止也とゝえ。周礼に美定の字ありて。註に定猶熟也熟卽止故以定言之といるふど。彼此考合せて然名づけたるに隨へを。さて此段を何やもゑに絶定言といふぞとふもぐたとへバのどけき春あつき夏すゞしき秋さむき冬といつゞけども。のどけゝ春あつゝ夏すゞゝ秋さむゝ冬といふ續

うず。詞もさいとをびれのづからきるしふよりてゐる。な
ほ續體言の下ゑ見合せてさとるべし。
○續體言といふ。いひふがしゑ下へつゞきて。おとゞれ趣意そ
こゑて落著せぬゐる。たとへば春いのどけし夏いあつし秋
いすゞし冬いさむしといへば。絶定言とゐて。詞も趣意も
落著するを。春いのどけき夏いあつき秋いすゞしき冬いさ
むきといへば。詞も趣意も落著せば。打きゝたるまゝふてい
落著せしやうゐきど。どゑやらふ心ずゝけせぬやうゐおば
ゆるゐる。そい何ゐ為ゑさやうゐるふうと。尋もとむをば。ゑ
い絶定言（キルヽコトバ）といい續體言（ツヅクコトバ）ゐる。又いうゑして續體言（ツヅクコトバ）ゐる

ぞとおゑひて。ロゑいひつゞけ見をば。春いのどけきもの夏
いあつきもの秋いすゞしきもの冬いさむきものとやうゑ。
物といふ體言へ。ものづうらつゞきて。詞も趣意もこゝゑて
落著をるゐる。こをゑよりて續體言とふづけて。或人の連體
言といへるいとらず。
○既然言といふ。既（スデ）ゐ然るといふ言ゑて。上ゐる將然言ゑ對へ
さる名ゐる。いさゝう其差別（ケヂメ）と言いんゑ。後撰ゑ「うさら夜の
月と花とと同ゞくば心しきらん人ゐ見せでや。古今ゑ天の
川もゝぢと橋ゑ渡せでやたゐふぞさつめれ秋をしも待つ。」と
ゐる此二歌ともゑ。せよりてやと受されど。前ゐるい下二段,

活言佐行の將然言よりぞと受けてそもふ願のやと添さるふり。俗ヨ「ミセタイモノデヤ」と云ふ意ふり。後ふるい四段活言佐行の既然言よりぞと受けて。うもヨ疑のやと添たるふり。俗ヨ「ワタスユエカシテ」といふ意ふり。如此く大ヨ差別いることもふり。よく〳〵辨ふべし。

○諸の用言ども。其まゝてい未語ト成ざるも多うり。譬バ四段活言ヨて。あうれさふどいひてい何の事とも辨ヘ難さと運用活言（一云受辭）とそへていうずあうでいうどあうんいうましいうバ。又わさずわさどれさんわさましわさバとやうふ言一バ語ト成て聞ゆるゞ如し。又其受るところよりうつり活用く事よていうずいいうぬあう祢と轉用きいうん

いいうめと轉用きもどする事。用言の例ヨたゞふ事ふきふり。詞八衢ふも記さきさる如く受る辭もて。六種の活言と分定むるゞ甚正くて。耶も違ふ事ふけきバ。よゝふる將然言の下ヨいい。すでどんまゝでと志るし。續用言の下ヨいてつゝぬるたりけりきと志るし。絶定言れ下ヨいめりうんべゝらしとうゝと志るし。續體言の下ヨいかふまでにとよりぶと志るし。既然言れ下ヨいどと記せること。本書の例ヨ倣へり。何度も讀ミそらんどおぼえて。わゞ物ヨふゝえて。物したらむヨい古の言ととくヨ得やすく。今事と記すふとこいやまちふうらむ物ぞ。

五轉名目	四段用言							一段用言							中二段用言						
	加行	佐行	多行	波行	麻行	良行		加行	奈行	波行	麻行	夜行	和行		加行	多行	波行	麻行	夜行		
	飽	押	打	逢	住	鉤		著	似	干	見	射	居		起	落	戀	恨	老		
將然言	か	た	は	ま	ら			き	ひ	み	い	ぬ	ね		き	ち	ひ	み	い		
	ず	ん	で	ず	ぞ			ず	ん	で	ず	ぞ			ず	ん	で	ず			
續用言	し	ち	ひ	み	り			き	に	ひ	み	い	ぬ	ね	き	ち	ひ	み	い		
	て	つ	な	け	き			て	つ	な	け	き			て	つ	な	け	き		
絶定言	く	す	つ	ふ	む	る		く	き	ひ	み	い	ぬ	ね	く	つ	ふ	む	ゆ		
	と	ら	べ	ら	ど			と	ら	べ	ら	ど			と	ら	べ	ら	ど		
續體言	く	す	つ	ふ	む	る		く	き	ひ	み	い	ぬ	ね	く	つ	ふ	む	ゆ		
	ふ	に	を	が				ふ	に	を	が				ふ	に	を	が			
既然言	け	せ	て	へ	め	れ		け	せ	て	へ	め	れ		け	せ	て	へ	め	れ	
	ど	ぞ						ど	ぞ						ど	ぞ					

言	下二段用言													變格用言				形狀言		
良行下	加行	阿行	佐行	多行	奈行	波行	麻行	夜行	良行	加行	佐行	奈行	良行	久活	善	惡	爰活	形久活	遠	
	和行	得	失	捨	兼	添	求	消	枯	來	爲	太	有							
ぬ	り	え	け	せ	て	ね	へ	め	え	れ		こ	せ	ら	く	く	く	く		
ぞ	ぜ										ん	で	ず	ぞ						
ぬ	り	え	け	せ	て	ね	へ	め	え	れ		き	に	り	く	く	く	く		
き	け										な	ぬ	つ	け					て	
る	う	る	く	す	つ	ぬ	ふ	む	ゆ	う		く	す	ぬ	る					
と	ど										ら	べ	ら	め	と					
る	う	る	く	す	つ	ぬ	ふ	む	ゆ	う		く	す	ぬ	る					
ら	が										る	る	る	る	る					
			ふ	ま	で	に	を	が												
れ	う	れ	く	す	つ	ぬ	ふ	む	ゆ	う		く	す	ぬ	れ					
											れ	れ	れ	れ						
											ど	ぞ		ど	ぞ					

○右の四段活言は。加佐多波麻良の六行を有て。阿奈夜和の四行をはふし。絶定言續體言一つ詞なるかよを詞、八衢をハこれと一つふしと。受辞のこと二段を分たれども。此圖をハ悉く二段を記し分さを。下をもこの例なを。まを既然言よを有と受け活用く辞にを。變格活良行の下をいふべし。詞、八衢を云く。四段活言は第一音。かさたなまらよを。んの辞と受るふ。俗言をいへることにを。そい其第一音とんの辞とと合せて。第五音こそとかもろといへを。めろんとゆこかざこんを

かざそをさんとをといたんといかもどいふなを」

○一段活言は。加奈波麻夜和の六行をにを。阿佐多良の四行をハふし。さて將然言と續用言と一つことばなを。又絶定言と續體言と一つ詞なる事圖の如し。詞、八衢を。るもどとそへてきるこ詞ことの絶定言なを。とつぐく詞ことの續體言なを。とと兼さるハ後の定をを。て。古くハさにひみいねよをさるこ詞と受る辞と用れを。取意とにを。そハ見らん見べき煮らも似べきおど多くいへを。さてこれ射鑄の活さと。詞、八衢をハ。阿、行とせらをさもど。諸書既を夜、行を加へされば。そをを隨へを。

○中二段活言は。加多波麻夜良和の七行を有て。阿佐奈の三行をハふし。さて將然言と續用言と一つことばなを。詞、八衢を云く。中二段活の第三音を。るもどとそへさる。くるつるふ

るむるゆるるこうると。俗言よハ第二音ようつゝてさるち
るひるこるいるゑるぬるといへゑ。おくるとれこるとづる
ととぢるおどいへるゞ如し。取意
○下二段活言ハ。十行ともかとゝぐく有り將然言と續用言
と同じ言おゑ。詞ハ衢ようく下二段活の第三音ゆるもじと
添ていふ。うるくるするつるぬるふるむるゆるるゝうると
俗言ハ第四音の方ようてえるけるせるてるねるへるめるえ
るれるゑるとうつゝいへゑうくるとうける。やするとやせ
るといふゞ如し。取意
○變格活加行ハ。詞ハ衢ようくくるといふ詞のみようて此外

おゝ受る辞おど圖の如し。但ゑ辞と受るハ。きゝきし
ろと受る格おるとゝれいいと稀ゝて。こゝおゝろおどこよ
ゑ受る多し。さてすべて辞活ようて。第五音ようて活くことゑもの
みようて外ようて例おゝ」。
○同活佐行ハ詞ハ衢ようて「活きざゑ受る辞おど圖の如し。但ゑ
ゑろおどゑ辞と受るハ。ゑようゑ受る格おるとさハいそゞせ
ゝせゝろおど。せようゑゑみ受るも外とハ異おゑ。すべて圖ようて
出せる辞ハ。五つようて別きて相混雑(アヒマジハ)る事さらようて無きと。右の如
くゑゑろゑ辞のみ他ようつきゑ。加行の變格ようもこの辞と。
こゝゑ如く用たるおどよく似さゑ。こゝおるハ第四音ようて活

きたるとゝ。加行ふるハ第五音ゑ活きたるけゝ異ゑて。其外ハ
全く同じ」といとれさるゞ如し。まさ何くもけ體言用言ゑてもその言
といひすゑて體よゑ。此詞ゑ活らせて。何すると多くいへゑ。
又中むらしけ言ゑハ。えんずる孫んずるおどもいへゑ。但體
言よゑを受るハ清ゑ。用言けんよゑを受るい濁ゑていふ例おゑ。
○同活奈行ハ。詞八衢ゑ云く。往死の詞二ツのえおゑ。活きざ
まハ。大低四段けゝ活の如くゑて。切るゝとつゞくとの詞二ツ
ゑ分ゑ。ころのむすび二つ「ゑ。
○同活良行ハ。有居の二つのえおゑ。詞八衢ゑいれさるゞ
如く。四段活けくすつふむるい。絶定言と續體言とを兼たも

ばゑるとあるとも。をるとをるともといふべき格おるとゑ
ゑとゑゑとも。をゑとをゑともといい。絶定言とゑゑ。をうと
いふ例おゑ。そけゑらめゑらんべーらーの辞ハ。續體言おる
るよゑ受る事。大らゝ四段活ゑ同じ。○まゝ四段活の既然言。
けせてへめれよゑ。此活ゑ受てあけらんゑけゑあける行け
きおせらんれせゑおせるおせれと既ゑ然有さまといふ言
ゑ。此故ゑ萬葉ゑハ飽有押有とやうゑ。有の字と添らきゝ
ゑそけ義おゑ○まゝ形狀言活ゑ此活ゑうけてよろゑく
あゑのゑーくゑゑ。あーくゑゑ。るけうゑ。るけくあゑ。
引合のひうゑ。のひきあひ。のひきあい。
ふ言ゑ。おきらハ云云有といふ言おるゝ。その意急るゑ

よて。如此く其ことばのせまきるおて○まさ運用活字圖の。
ざてざわて　たてわて　とあて　けて　きてあり　めて　えあて
の引合　たての引合　の引合　の引合
合　おて　あて　おどさお此てさらさま属け
の引合　せて　てあて　の引合
るものおて。この故ま。有のこころと含める事。運用活字圖。ま
さ結辞の下おもいへて。併せ考ふべし。

○形状言ハ圖のごとく久活志久活祁久活ともま受る辞の
例。上おる五種活しい異おて。さて此活の轉聲とふさて。よ
ごとにしざまおど下へつぐくるにて。まさと月清き山祢高きおどげよ
げをしげふどおとうくるにて。いひすゑて體言とせるハ。絶定言お
るべくおもいるこおて。

自佗活言

上おる四種活言の進退作用おるおつけて。そきおうハて。
自然すると佗よて然せらることの分別にて。詞通路小歌よ
むおも。文かくおも事と記にふも。萬事と分ち其状と委しく
知らするおきバ。專この自佗の詞の活用と。最と心得べきま
ざおて。其ハおのづらは定格にて。此方の事と云ふまハ。
此方小用ふべき言と用ひ彼方ま事とかさるおハ。彼方ま用
ふべき語と用ひざきバ。其事委しく分きば。自佗混雑して言
語成ハぞ。其さま聞え難けきバ。等閑ま思ひ過さば。よく辨へ
置べき事おて抑此活用ハ千萬の事と。委しく言ひ分つわざ

ふきバ。其活用さまも種〻多ろると。世の人自佗のことゞいたゞ。烟ふどのたつといふハものづらたつ事ハいひ。たつるといふハ人ハたつる事ハいひ。重亂いとくゝうやうの自佗ハ合離の義ハつきてうハることゝて四段活と下二段活とのうへハのミ有ゝて佗の活言ハわづらはぬ事ふきバ別ふゝ。下ハくもしく辨へおけゝ。花のちるといふハものづらちる事。ちらけといふハ風ふどのちらけ。此ハ四段活言ハまさ四段活佐行の添さる例ふゝ事とのミ思ひて。委しく考へ知るべき事とも思ひらず。又この事と論へる書も無けきバ。おのづら心と附る輩も無くもの歌ハミものよく心得さゝと思ふ人も。取もづしてハ誤る事ふきハ非バ。況て初學ハ輩ハ甚ハたゞ〻〻〻て。常ニ誤る事多けきバ。其

定格と教へ諭ハ。とハゝて。自佗の詞と六段ハ次第て。一目ハ見度し心得易ハらしめん爲ハ。圖ハ出して懇到ハさとされさゝ。それハたまのふゆかハゝて。重亂此書と著述ハつけて。今ハ〻捷徑と見得つるかハゝて。一目ハ見度し心得易ハらしめん爲ハ。圖ハいらハして其定格と教へさとすものふゝ。さてうハ自佗とゝうつつ辞ハ。佐行良行相雙對て受る事ハて。各上ふる用言のかさふきるものハて。別ハ一種の活言ふあらバ。この故ハその受るところハゝて。五轉する事すこしも用言ハ例ハたゞてバ。但合離ハことバの自佗ハ此例ハいらさきバ。下ハ一圖とハらハして別ハ物せゝ。

活言	下二段自他活言											變格自他活言		
下率	得	受	失	捨	兼	添	求	消	枯	植		來	爲	往
り	え	け	せ	て	ね	へ	め	え	れ	ゑ		こ	せ	か
														れせさ
												らさ きせ	らさ きせ	れせ
												らさ きせ	らさ きせ	れせ
												さす らる	さす らる	す する
												さする らる〜	さする らる〜	する る〜
												さすれ らるれ	さすれ らるれ	せ そもそも るもも

四段自他活言											一段自他活言										中二段自他
飽	押	打	逢	住	鈎	着	似	干	見	射	居	起	落	戀	恨	悲	老
ろ	た	さ	は	ま	ら	ま	ね	い	み	ひ	に	き	ち	ひ	い	み	い
れ せ さ						ら さ き せ					ら さ き せ						ら さ き せ
れ せ						ら さ き せ					ら さ れ せ						ら さ き せ
す す る						さす らる					さす らる						さす らる
す する る〜						さする らる〜					さする らる〜						さする らる〜
せ すれ るれ						さすれ らるれ					さすれ らるれ						さすれ らるれ

右は四段活佐行ようつゝて。さゝすせと活用辞ハ。こづゝら物と然するゝ。故爲の字は義ゝ。又人はうへとうやまふ辞ともゝるゝ。○下二段活佐行ふうつゝてせすそるすゝもるゝるゝるゝもの對ゝて。四段活ゝさ變格活。奈行良行よゝ受く。させさすさするさすれらるらるゝらるゝらるゝもの對ゝて。一段活中二段活下二段活ゝさ變格活加行佐行よゝ受く。と活用く辞ハ。佗と

して然せさする辞ゝ。故ゝ令は字の義ゝ。まさ尊き人のゝゝまゝふと敬ひていふ辞ともゝるゝ。○下二段活良行ふうつゝて。もるゝるゝるゝもの對ゝて。四段活ゝさ變格活奈行良行よゝ受く。らもらるゝらるゝらるゝもさせさすさするさすもの對ゝて。一段活中二段活又變格活加行佐行よゝくるゝと活用く辞ハ。佗よゝ然せらるゝの辞ゝ。故ゝ被の字

は義ゝ。

○四段活の將然言よゝ。同活佐行ふうつゝて。ゐらさんあらゝゝゐらすあらせといへバ。こづゝら物と然するゝ。下二段活佐行ふうつゝて。あらせゐらすゐらするあらすれといへバ。佗と〻て然せさする辞とゝ。まさ下二段活良行ようつゝて。あらもゐらるゐらるゝゐらるもといへバ。佗よゝ然せらるゝ辞とゝるゝ。さて此四段活は限ゝて。合離の義は つさて下二段活と。たがひは入交ゝて自佗の分るゝことバゝんゐる。野之口翁の說は。離もてゐる物と合する詞ハ。四段活天然とゝ。則佗よゝ然するゝ。下二段活人爲とゝるゝ。則自然するゝ。

そもゝ反〳〵て。合ひて有る物と離れ詞ハ。四段活人爲とおゞて。下二段活天然とおるなりといえれさゞて。こゝをよゞて一目ゝ見度〳〵。心得やすからしめんが爲ゝ。さらゝ圖ゝもけする事左のごとし。

合		離	
自	他	他	自
附		裂	
け	か	け	か
け	き	け	き
く	く	く	く
くる	く	くる	く
くれ	け	くれ	け

かくはごとく相反して用とおれ事少〳〵もたゞふことおし。余ハ此例ゝおぞ〳〵へ知るべし。

○一段活。中二段活。下二段活おど。圖のごとく將然言よゞて下二段活佐行ゝようつ〳〵て。きさせきさすきさするきさすれとゆうゝいへバ。他ゝとして然せさする辞おゞて。まゝ下二段活良行ゝようつ〳〵て。きらきらるきらるゝきらるれとやうゝいへバ。他ゝよゞて然せらるゝ辞とおるなり。

○變格活加行ハ。將然言おることよゞて。下二段活佐行ゝようつせバ他ゝとして然せさするおゞて。下二段活良行ゝようつせバ。人ゝよゞて然せらるゝ辞とおること。上の例ゝ同じ。

○同活佐行ハ。將然言おるせよゞて。四段活佐行ゝようつ〳〵てせさんせ〳〵せすせゝといへバ。ゝづゝら物とゝゝするおゞて。

まゝ下二段活佐行ようつせば。佗として然せさする辞なり。
まゝ下二段活良行ようつせば。佗よりしらせらるゝ辞とな
るなり。さてもろ〳〵れ體言より。せさすせらるとうくる事
多きものなり。こゝ體言とせよりうけてうをまさすらるの
辞のそひて。活用けるまて悉く此屬なりと知るべし。
○同活奈行良行より四段活佐行まうつせばまづら物と
しらする辞なり。まゝ下二段活佐行からつして。いなすといら
へば佗として然せさするなり。下二段活良行まうつして
いなるといへば。佗より然せらるゝ辞となるなり。思ひまぎ
ふることなられ

運用活字

諸の用言より受る辞と。運用活字と号けとり。然るに上なる
用言のまゝにてハ言さしなりて。未語と成さゞるも有る
と。こゝに舉たる辞どもに移しまくれば。悉く其用とをくの
ふるものなりとなり。詞八衢に。受る辞と圖なども出して。
煩ハしきさで言へると。無益の事と思ふ人もいるべけれど。
受る辞ハ圖の如く横に通りて。少も違ふことなく。いと正しく。
まゝ四種の用言と別ち知らんに。この受る辞もて定むるが
肝要なるべよく辨へ知らしめんが爲なり。といるまよりて。
用言のところに將然言にハ。すでにんまして。續用言にハ。

つゝぬるなどけども絶定言はい。めどらんべーらーとかー。續體言はいかふまでにとよどが既然言はい。ぞぞと其下は受る辞の大抵の定格と舉たもど其ハ五轉の位と定むる目標ぞうどはものせるはて。委しくする時ハ。おほはまゝ有てその受る辞まゝ五轉ーて。上むる用言は屬るはどうつど活用うぬ有ど。こをふよど一段づゝ圖ふものーて其用法を知らーむ。さて竪は五段はわうち志るーたるハ受て用く辞どもふど。頭は不或ハ將とうけるハ。假はうつべき正字を考へ志るせるふど。圏中むるハ無活用辞どもふど。用言まゝ結辞は條はうハいせ見て。よくくく思ひ辨ふべくふむ。

將然言運用活字圖

飽	著		起		得	
將	將爲	令	不有	無活用辞		
不	〇	ま	ら	ん	ふ	く
ず	せ	め	ざ	ん	で	ちくま
ず	ま	く	ざ	ん	ど	
ず	ま	め	ざ	む	ど	
ぬ	ま	め	ざる	むる	ど	
ね	ま	ろ	ざれ	むも	ども	

右の不行ふる。ずぬ紹ハ。爲もどは反對ふど〇將行のんめハ。はゆひ抄ふいまゝ然有らぬ事をとろど。ぢらまーていふ辞ふどとはど。〇將爲行のませ。

かア。詞玉緒ふ「おかよそましい。んと延たる如く聞えて。大ろこんといふと同意かアとなア。○令行の志めしむ志むるしむきい。下二段活麻行の屬かア。○不有行の。ざらざアざろざきいずなアのひきなひかア。○ふんい。なもひ抄ふ「そとなつらふることばかア」となア。そいも徒の係辞のミまてむすぶ例なる事。詞玉緒ふ委し。○でい不の轉用かア詞玉緒ふ「しての約まるなア」となア。○じも同じく不の轉用かア詞玉緒ふ。ずのいまざ然らぬとう称ていふ辞かア」となア。○ばいものゝもかアゆきを称ぢふ意かア。用言の下ふくいしくいへア。○でやい上ふるばふ。願のやれろいまるかア。○ふくもくまい。形狀言久活まて。無もどれ意かア。

續用言運用活

起			著		飽				
竟	去	而有	來有	既	竟既	往既	將竟	將往	將既
て	な	たら	けら	け	てけ	ふけ	○	○	○
て	に	たア	けア	○	○	○	てん	ふん	けん
つ	ぬ	たア	けア	き	てき	ふき	てん	ふん	けん
つる	ぬる	たる	ける	し	てし	にし	てん	ふん	けん
つも	ぬも	たも	けれ	しろ	てしろ	にしろ	てめ	ふめ	けめ

字圖

得エ			
無活用辞	つ〜	げて	げ	も
祢	ぬ	ぬて	あふ	ぐ
けら	ける	こせ	しぐ	や
ちば	だよ	ぬる	よ	か
ちず	ぬる	ぬる	え	こそ

右の竟行のてつつるつまい。下二段活多行の屬ちて。○去行のちにぬぬるぬまい。變格活奈行の屬まて。所謂畢(イハヒル)ぬのぬまて。將然言よてうくる。不行のぬとい異ちて。○而有行のたらたてたるたまいてありの引合まて。變格活良行の屬也○來有行のけらけてけるけまいきていての引合まて。變格活良行屬ちて。○既行のけきし去ちい。所謂過去(イハユル クワコ)のしちて。さてこ

くの目標(メジルシ)1。既もじと借用ひさるハ。或人の說かよもて。くハしくハ結辞の下(トヨ)1いふべし。○竟既(テキ)行のてけてきてしてしらハ。下二段活多行の續用言よて。過去のしかつぐれさるゞ。一つハ用言ハ如くかきるなり。○往既(マキ)行のれけかきれしかしらハ。變格活奈行の續用言よて。過去のしかつぐきれるゞ。一つハ用言の如くかきるかて。○將竟(テム)行のでんてめハ。下二段活多行の將然言よて。んめとうけ活用(ハタラ)ける辞かて。○將往(ナム)行のむんかめハ變格活奈行の將然言よて。んめとうけえさらける辞かて。○將既(ケム)行のけんけめハ上かる。既行の將然言よて。んめと受け活用(ハタラ)ける辞かて。○つゝれ語の間まいるハ。

てゐ通ひ句は終(トヂメ)まらるゐ。いひさゝて言外の意とゝ〳〵む
る辞ゐを。○絲い。變格活奈行の屬まて。今(ナホ)する辞ゐを。○けら
しゐ。絶定言よをうくる。らしといふ別まて變格活良行の將然
言よを。しとつゞける辞ゐるゞ來有行のけらまをかさゐを
るゐを。○ゐむい變格活奈行の將然言を。ゞまて受てゐをも
さとそうを絲ゞふ辞ゐを。○ゐゞらいいゆひ抄まを。本まをの
隨(マヽ)まーゐさて。取直し撰(エラ)びすてゐどもせぬ辞ゐをといを。○
がてい難(ガテ)まて形狀言久活れたぐひゐを。○がてらい。物いを
てその傍(ちかく)ゐ事とかぬる辞ゐを。○こせい。乞(コヒ)爲ゐを。萬葉まを夢
まを見えこゝろ。ちをこすゐゆめ。いをこせぬゝもゐどいるこれ

ふを。ともゐ乞願ふ意とゐるなり。○ゞでまい。いゐもひ抄まを。其一
つと。ひいきらめて。殘をと思せたる辞ゐを。といを。○の
ゝい。うれ物事と一條(トスヂ)またてゝいふ辞ゐを。○げいいゐもひ抄
まを。表れさまと見て心と量をいふ辞ゐを。といを。○いゐふい歌
まい。何いゐへずとよめを。いゐもひ抄まを。ついまいさいらんとす
る物のいまざえしいてぬうちゐといふ意ゐをといへを。○
しゐい。てしゐてしゐむ ゐしゐゐしゐゐ るどゐるゞく願(ネガ)ひとゐる辞ゐを。○
にい。係辞ゐを。徒(ヨ)屬(ル)。變格活奈行の續用言まて。ゐまぬぬるぬ
もとそさらきて。續體言よを受るにといを別ゐを。この故まて
と相(アヒ)雙(ナラ)びて活用(ハタラキ)とゐすこと。てんゐん相ゐらび。てきにを相

雙ぶぐごとし。○そもぞやう（やよ）屬にころけ六つハ係辞ふて。

絶定言運用活字圖

飽（アク）		著（キル）		起（オク）	得（ウ）		
也	見有	將有	可	不可	無	活	用	辞
ふら	めら	○	べく	まじく	らし	べし	かし	ふ
ふて	めて	らん	べく	まじく	と	べら	ふ	も
ふて	めて	らん	べし	まじ	とも	ぶ（ボ）	そさ	
ふる	める	らん	べき	まじき	とて	ぶよ	や	
ふき	めき	らめ	べろき	まじれ	てふ	ぶろ	よ	

右の也行のふらふてなるふきハ。變格活良行の屬なて。ひ抄よ末るてといへるこれなて。漢文よ也まさ矣字とかけるけくひよて。續體言よて受る小ひての引合のなてとハ異ふて。○見有（メリ）行のめらめてめるめきハ。えひてれ引合よて。變格活良行の屬ふて。○將有（テム）行のらんらめハ變格活良行の將然言よてんめと受けたらける辞ふて。○可行のべくべしべきべけきハ。形狀言久活の屬ふて。○不可（ジ）行のまじくまじまじきまじけきハ。可行の反對よて。形狀言志久活の屬ふて。○らしハ結辞の下よいへて。○といハ詞玉緒よ。すべて絶定（キルヽ）ことバと續（ツヾ）くる辞ふて」とひり。ともとてふ（といふの引合）てへ（といへ）

引合ふと此屬ふて。〇べきべらい可行の轉用にて。べしといふに大らさ同じ。〇が孫ぐにい詞玉緒に。中昔の言にさきぐ孫むこが孫ふどい〳〵ると。同じくて。か孫て其きうふ儲けて待つ意ふて」とはて〇ぞうて。はもひ抄に。數有にも。ふがき物に分際と立て。たぐこきはどこくもとざけふどいふ辞ふて」とはて。〇かしは。はもひ抄に。ことてにまろせさる事といひて。人に思ゑせさる辞ふて」とはて。〇ふい禁止辞の下にくいしくい〳〵て。〇むさい。事といひてまさろれうへに。はらんとする事とさしていふ辞ふて。〇やに二種はて。その一つは問いろくるやふて」はてやもしやふどにて。續體言よて」はろふさろと。受くと。同意ふて此やもかも同じきろとおも〳〵ば。受るところふ大ふ差異はる事にて。やは絶定言よて受け。かは續體言よて受るが定まてふり。續用言續體言よてろくるやは疑のやにてころは二種とは異ふて思ひ混ふることふろき其一つは歎息のやにてことてやかひふしやふどいふ此るて。ロに言試て。問ろくる方れやは。志ぐらくその詞と。續體言ようつしふくてかと受てその意とさざむべく歎息の方れやはことてよかひふしよとよと通しうけて。それ味と知るべくふむ〇よも歎息れ辞にて。大む孫やに同じ〇ふは歎辞ふてつらしふろふしふのふるてはやひ抄に。「人にいひろくる詞ふぐら。思ひはきて、

いひとて言ふもいふ」とはて○もい歎辞ふてうもしもうも
しものもまて。大うさふ同じ。はゆひ抄ま。すべてやふもの
三つ心かよふこと多し。古集ま通ひて異本まもまる歌はま
さはてといへて。ふは助辞の下まいふとはいせ見るべし。

續體言運用活字					
飽（アク）	著（キル）	起（カクル）			
在	無	活	用	辞	
ふら	か	を	ぞう	から	も
ふて	かふ	ふう	だよ	まゝ	て
なて	かも	が	さへ	ふぐら	ず
ふる	まで	が祢	すら	ふし	ふん
ふき	に	がに	ごと	のミ	や

圖得（ウル）

	か	こそ			

右の在行の。ふらまてふるまきいふはて引合まて。變格活
良行の屬ふて。○かい。語のとじめまおくかまてやま通ふか
續體言よて受けて係辞とふる。とい異ふて。さて此語の終ふもくかま二種
はて。其一ついとひろくる意まて。はるるふきふどいへる
かまて。絶定言よて。はてやふし。やといふと同意ふて。其一つ
いかふは意ふ通ひて歎息辞とふもるふて。其物其事ふよて
て唱へ試ゝまべ。その意味ふのづらふるゝものふて。詞玉
緒ま證例とはまま舉らまゝ
まと。此二例まい過ざるふて。○かふい。上ふる歎息れ方れか
まふもじは重てはいて。一つは結辞とふもるふて。○かもふ

るくハかもの意ニ用ヘまど。萬葉集ハこゝろまでハかもとい
ふ辞ハアて。かもといはまざア
ア。後ニハ疑ひ方の辞とおもア。この故ニハゆひ抄ニ目ニ
も心ハも餘まる事とまづかとうゞひて。やゞてもと詠む
る辞とそへたるおア」といへア○までハ。ハゆひ抄ニ。その處
まで行き至る心といふおア」とハア○にハ。續用言ニアて受て
ハにぬぬるぬまと活くとハ異おア。ハゆひ抄ニ。さすところ
ハ中ニものとやアすゑていふ辞おア」とハるゝもおア。○を
ハ此係辞の下ニハへア。○ニアハ。ハゆひ抄ニ。物と定めおき
て。ゝもよアて出ていふ辞おア」とハア。○がハのハ通ふ辞おア。
ハゆひ抄ニ。詞とのべていのハのといひ。詞の勢きハまる時ニハ

がといふ」ハへア。○がハ孫がにハ。絶定言の條ニハへア。○で
ハアとも。おれ〳〵條ニハへア。○だハ續用言の條ニハへア
○さへハハゆひ抄ニ。一つハ事ハ二つも三つもうひたるを
いふ辞おア」とハア。○すらハだハ同ド。○でとハ。毎くハ字
のこゝろおア。○からハ。外を待さびして。其物事ハ上ニハる
といふ辞おア。○おがらハ續用言の下ニハへア。○ふらしハ。
にあらしの引合おア委しくハ結辞の下ニハへア○のミハ。
續用言の條ニハへア。○もはぞもんハ此もんハ。ぞといふと同
さ〳〵よまぬ事ニて。多くハ文章の方ニつかへア。うハ歌ニ
此辞をつかへバ。詞つまアて調ハしく。文章ニ用ふをバ。詞おア
ざらかおアてこよおけをバおア。續紀の宣命ニハ那母と
ハへア。ふるくハもんといハくさざアけらしハゆひ抄ニ言ふ

べき事と押出して。慥ニことゝるやうに時ニ。句の中ニ有る辞ふアとあアやか属れこそれ此七つニ上のにと徒ニ属れ。ふどゝふ係辞ふア。

既然言運用活字圖					
飽	著	起	得	辞	
無	活	用			
					ば
					ぞや
					ど
					ども
					や

右のぞい。既ニ然有ることと受けていふ辞ニて。将然言ヨアア受るばといふ。大ニ意味はかゝる事すてニ云へア。○ぞやハ上ふるぞニ疑はやはうハもるもア。○どどもの二ツハ。雖の義ふア。詞玉緒ニ此雖の字は意の言ニ清と濁との差別ふア。既ニ

然る事といふヨハどどもと濁ア。未然らざる事とふらよ〜ヨいふヨハ。とともと清ていふ。此清濁ふよアて。上の受る言の格も異ふアとふア。○やハ此辞ニ二義ふア。其一つハ疑はやふアこれヨよアて語は半ふふアて。結辞もその掟をたがへざる事ふア。其一つハ歎息はやふア。こをふよアて。語の終めハ有アて。趣意その辞ニて落著する事ニて。ふもやハふア。ふもやいふアよと。心ニ味へ知らるしふどの意味ハ。ものづゝら知らるしもはふア。ふ語の終ニふるし。疑はやの結辞といひのこしたるふア。そハ此例ニならびよく〜思ひヨくべくふん。

指揮辞運用活字圖

何よ 何ね	られ れる けれ
無活用辞	
かー	と
や	とも
	とて
	てふ
	てー

此ハ四段活まさ變格活奈行良行ともよ既然言すふいち指揮とふると本よして。一段活中二段活下二段活まさ變格活加行佐行の將然言よア。よまさ祢と受て指揮とふる辞よアうけさる辞どもふア。○とともとてふ といふ といへ の引合 て の引合 かーふど。既よ絶定言の條よいへア。○やハ。あやい抄よ。「何よとよめるよ似て。心いさゝう打ふるまへるやうよよめり」と

體言運用活字圖

言				
爲	脣	肯	無活用辞	
せ	せら	たら	と	さー
ー	せア	たア	とも	すら
す	せア	たア	とふ	のミ
する	せる	たる	よ	ろう
すれ	せも	たも	や	から
			てー	

此ハ諸ゝ體言よア。受る辞の大らさふア。中段よ言といふ字と書さるハ。そこよ入て孰の言をも置べき爲。假よ志らせるふア○爲行の。せーすするすもい諸の字どもよア。解レ釋ふと變

格活佐行ふうけ活用くふつ。○爲有行の。せらせてせるせを
ハ諸の體言よて紅葉せて冬ごもてせりふど受け活用く。〜てなてれ引合
よて、變格活良行の屬ふて。○止有行の。たらたてたるたをハ
となてれ引合よて。漢文よ君くたらずとも臣くたてふどいふ類也變格活良行の屬
ふて。○とともハ。絶定言の下よいへて。○とふハ。といふの引
合ふて。○てふてへハ。絶定言條よいへて。○のハ連辞ふて。○
へハ係辞の徒の下よくとしくいへて。○よやハ。呼びうけて。
なつらふるこゝろふて。○らハ。等もゞのこゝろよて等〜〜
並ぶものよ有るかいふ辞ふて。○さへもらよてからハ。續體
言の條よいへて。○のよハ續用言の條よいへて。

禁止辞

上ふる用言のうへふそいハて。禁め止る辞なて。そハ諸の用
言どもの。作用ふるよつきて。又そもと禁め止むる辞のかふ
らず。無くていえならぬよざふもバなり。なもひ抄。何ふと
ふ何うとハ。大む孫勿莫の字はこゝろよ似さるべし。譬へバ
とぐさるべき人は。行くといさむるハ。ゆくふなて。東よ行く
べき人は。西よ行と禁め。明日ゆくべきよ。今日行くといさむ
るたぐひハ。ふ行そなり」と有るぞ然る叉ふる。さてこの何ふ
ハ用言の第四段ふる。續體言は下よふとハふ辞と加へて。な
くふもすふとやうふハふぐ定てふてまよふ何そハ用言の

第二段ふる。續用言み上ゑ。ふもとと置き。下ゑそといふ辞と加へて。ちからきそふおゝそとやうゑいふぢ定まアふり。さてふ何そといふ辞と。近れ世れ人い何そとのゑいへるゑ。いゑぢきひぢ事ふア。こゝれふい勿れ字義ふる事いたも知きるおとく。下ふるろい其とさす辞ふア。この故ゑ下ゑにろそい省くとも。上ゑにるふと省きてい禁め止むることバゑいちらぬふよア。古書ゑいふ何とのゑいひてそもぢふきさへいと多うア。まさ何ふやめゆめ何ふま何そもゆめふ何うふく何そもふど。ふとゝぐくこゝれ二つよア轉用せるふア。と知るべゝ。

助辞

すべての詞の最初。まさ中間まさ最後ゑ添いアて助辞といふものにア。其用い何の爲ふるふちと考ふるゑ。その語意とたすけ。その旨趣と強くきふえゝむべきもうゑんにアける。然もバ各ふゝろと異ふゝふもぶきとと別てるふるべきと。世の人その事とい心づうぬげゑて。譬へバゑぞアとさだアといひゝ。熊野とき熊野ふどいひうへても。ども小意趣ゑにづうら祢バ。ひとつ事ふアとやうゑ思ひためるい。いゝドく麁漏ふるゑざふアけア。ふのま年ごろ此事ふふゝろとつけて。古人たちの思兼につきふゝろ用ひと見得さるふよア。

その徴と説といふ語に彙して委しく記さつゑさるとゝ。今この捷徑
とゝるに。因そふおりに出るまゝ。その大略といざゝていい
さゝのおどろろさんとに。

○詞の最初に有る助辞。

か　か青ふる玉藻沖つ藻。手放きもとちもかやすゝ。おどの
かるゑ。さて此かは彼の義にて。そおさおるものとそつ
うふ見ていふ辞おゑ。大の故に辞のかも。その意よゑう
つゑて疑とはおまゑけゑ。

け　けらとゝ。けどほゝ。おどのけおゑ。さて此けは氣の義に
て。物の芽ゝと。にらうじめにもうゑていふおゑ。

さ　さむゝろ。谷蟆さわさゝ。おどいふさおゑ。さて此さは
狭の義にて。廣ふふ對へまゝ多きふ對へて。その物と事
とと取せばめて。その純粹といゝ方とさに辞おゑ。

ま　太年のまゝ折りのゝちろへて。若草のおもひゝきへて。お
どいふまおゑ。さて此まは古書に其をゝといへると同
義にて。たゝろふ其とうごくまゝくさゝとる辞おゑ。

た　たもとわゑ吾はそこふる。玉矛のゝちとた遠ゝ。おどい
ふたおゑ。詞玉緒に。たは回の意にても有るべゝ。回はた
もとも活用きて回ゑ行くやうの意おゑ。運字轉字おど
ともかけゑとにるゝ如し。

ま

まま玉つく尾張の國。ますげよ〳〵蘓我の子等おどいふまあ。さて此まい眞の義よてもの〳〵正中とマンナカといふゞ如く。その物の徧(カタ)よらびよく足あと〳〵のそあて。不足(カタ)ところおきといふ辞おあ。

み

みとら〳〵の梓の弓。みさむらひ御笠とまとせおどのみあ。さて此みいその物と目〳〵て見。こゝろもて任(ヨサ)〳〵おど。事物の空虚(ウツロ)おらぬ方よあ。さす辞おる故よ。それよあ轉用(ウツリ)てい。御某(ウツロ)といひて尊稱(ウヤマヒコトバ)とおきるもとも事物の空虚おらぬ方よあいふおあ。

や

「下ゞさくやゞさく取らせ。」やよや待て山郭公ことづてんおどいふやおあ。さて此やい言語四種論ハ。「トモニヨブ聲ナリ」といゝる理あいさる事おゞら。その義とおゝて見るハ。彌まゝ矢の義よて其事理を貫ぬきて。ほよく指す方よいふ辞おるべくおもいる。

い

いゝとらすも御木の棹橋。白雲もいゆきたゞうあ」おどのいおあ。さて此いゝ射の義よて。的當(メアテ)とするところ有あていふ辞おあ。

を

「二並みのと筑波山」ぬきてをゆらんおどれをおあ。さて此をい長の義よて。事物のをさ〳〵きとめでゝいふ辞おあ。

○詞の中間に有る助辞

た　「名ゆ〜おいど」「たま〜うもゆどけ〜」によて名ゆ〜」い俗に名ニソレといふこゝろ。「たま〜いタレカソレの意ゆる事初の〜ゆ同じ。

ら　「憶良らい今もまうらん」「くさ〜すつらん絶綿らい」もゆどいふらゆ。さて此らい等の義によてその一つと言ひてその餘の等類ともうぬる辞ゆ。

ろ　「たふとさろう」「かゆ〜きろう」もゆどのろゆ。さて此ろい上ゆるらゆ等〜く。等の義ゆる事い大同ろまど小異ゆて。有の義の含ゆたるらんとおぼめるゆ。この故に「たふとさろう」い貴く有る哉によてよく通ゆ。「くれろう」い哀く有る哉によてよく通ゆるゆ。

○詞の最後に有る助辞

さ　「うま〜さ」「かゆ〜さ」ゆどいふさゆ。さて此さい形狀言久活志久活祁久活と轉じ受さるゆゆ。その意用ひすでに上にいへるさゆ同じ

ゆ　「山ざくら咲ゆけら〜ゆ」「花のいろいうつゆにけゆ」などいふゆ。さて此ゆいうちゆゆめていふ辞ゆることゝ。絶定言運用活字の下にいへゆ。

祢　「ゆゆ祢」「をゆ祢」ゆどいふ祢ゆ。さて此祢い去の義にて

變格活奈行の屬にて指揮の辞とおもるるなり。尚續用言又指揮辞は運用活字の下にゐへり。

み

「月清み」「山たかみ」おどいふみなり。さて此みの義い上にいへるが如く。その事物の空虚(ウツロ)ならぬ方によりいふ辞なるがゆゑに。俗に某サニといふこゝろにかる事。玉霰などゝ見えさるが如し。なほ運用活字は下ゆもいへり。

ミ

「うまゝ」「かるゝ」おどいふもなり。さて此もの義い係辞もの條にさ絶定言運用活字は下にゐへるがごとくみきもながめ辞なり。また「ひゝ君い」「ふぢ袴ぞ」おどいへるも。大うゝ同意にてなり

や

「あづまたやゝ」「やおどいふやなり。さて此やハ上に云るせる如く。彌(ヤ)〻矢の義にて具事を歎息(ゲ)くいふまりに。その意を剛(ダ)く數(ヌ)る辞なり。

よ

「ますげよ」「つき世は中に住ゝわびぬとよ」よおどの類ひのよなり。さて此よハ令(ホ)する言なることに已ふ指揮辞運用活字に下にゐへり。

を

「うなにやゝえとこと」「八重垣つくる其八重垣」おどいふをなり。さてにもちのをハ。うの事はをさ〻〻くとゝのかりてめでたきよゝなる事。上にいへるが如し。かくはだとく其れくべき所に。定まる位(クライ)の有りて。上だうり

小置て中下よい用ひ難き有て。中よれ〻用ひて上下よいかうもぬ有て。下ふのゝつうひて上中よいふつゝおろざるふど。種〻ふるが。それ意味もまゝさまゝくよて。稱美とふてて譽めたゝふる辞とふる有て。尊稱とふて崇まへたふとぶ辞とふるうて。歎息とふててうの事を深く思ひいれて。打ふげくうまて。言よ出て得も言ひたらぬ餘韻を添ふる辞とふるなど有て。甚も奇しく異しきものふふんうてけるふは此助辞よつきてい。いそまはしれ事どもいと多かきども。くゞくしくものしたらむよい。中くよ初くしれ華ふどの爲よい。まどいしき事もこうとてゝふ漏しつ。

係辞

かゝてふをはとい。紐鏡ふる結辞と三條よたてゝ。其かしらは右行い。はも徒中行いぞや疑左行いこその辞どもふきふて此い上よて言ひ下したる物事は中よてすぐれて重く止事ふきと撰分。其專要と有るもの一つと取出て。下ふる結辞ふうちういせんためよふん有ける。是ふよて微細ふる大ゝろ用ひも何もうまく知らるゝとざれば。よく古よて用ひ來きる例と尋糾て。深く考へものすべくふんさてこゝふはも徒ぢや疑こその七つと出して。のとはぶけるい。のは係辞よいらぢ。此と彼と離くふるものと連糾接くる辞ふて。

大の故ゝは係ゝぞや疑ゝ疑ゝそと重ねてはもども。そのむすびはゝぞや疑ゝろゝて結ふゝても炳焉ゝて。然もべのゝて結べるはいろふと考へる。詞玉緒はいざされたる。變格といふ類ゝて。終ゝの句ゝ歎息の意ゝて。留ゝの下ゝかもまさよやもどいふ辞と加へてさくべれぞ多ゝてけるこれゝよゝてもぞらくゝふゝは省きつもは後の人はさだめとまつ。

は

此はゝ。續體言ゝ體言ゝ受けて。此と彼とを言分つ時は係辞もゝ。其證例を言ば春はのどけし夏はつし秋はすゞし冬はさむしもどいふもゝ。此をを何故ゝ言分つ辞といふもどゝ。夏秋冬は有れども中ゝ長閑ゝは春もゝ。秋冬春は有れども中ゝ暑さは夏もゝ。人は言へども我は言はず。人は行けども我は行ずもど。人と我とを言ひ分ち。春と夏とを言ひ分ちまさいく千萬とも多ゝる物事は中ゝても。そもはこれはといひ分つ辞もゝ。○また此はを濁る時は。いさく辞は意かはるもゝ。詞玉緒ゝ濁るはゝ既ゝ然る事といふと。未然事をかゝていふとの二つはゝ。既ゝ然る事といふは花さけば月いまばもどの如し。未然事をかゝていふは花さかば月いらばもどの如しといそもれゝ。此ことは用言ゝ將然言續用言の運用

活字の下よ既ニ云アリ。はまと俗言ていふ時ハ花さけバ月いまバと花ガ咲タ（サカイニ）まさカラ月ガ入タ（サカイニ）まさカラまた花さらバ月いらバと花ガ咲タ（サイ）ナラ月ガ入タ（イツ）ナラもどいふハどけ差異（ケヂメ）ふア。

も

此もハ續體言よさ體言よア受て此ニ彼と兼合する時ハ係辞ふア。其證例と言ハど。此春もけどけ〜此夏もいつ〜これい去年の春もいつのどけうアしよ此春もまさのどけ〜去年の夏も熱うアしよ此夏もいつ〜とうれとこれと兼合せていふもふア。人もいひ我もいふ。人も行き我も行くかやうよ物二つ兼合せていふよア。いく千萬とふく多

うる物事とも兼合（カネ）せて言ふ辞ふア。また物二ついひふらべずして。只一ついふる時もそれと此と物二ついふる心よていへる有ア。それい其ふころと得（エ）て見る事ふア。たとへバ古今ふいつまてうろ野べニころけいくゞれん花〜散（チ）らずハ千代もへぬべ〜」といろうされこころニて味（アヂ）ハへ知るべし。

徒

すべて歌も文もそれ所こて詞けさるこふよア。それ趣「意通」ずることふア。されバ絶定言ハ用言の下ふもいへるゞ如く。此辞よてされてそれ事と決著（ケツチク）するよ。係

辞ふくても。もとよりを切もすわる事ふり。さて此徒に屬
さてその格にて結ぶ辞四つはりてふをへゑもふり。つ
いでふいさゝら其義ととくべし。○てい下二段多行の
辞にて續用言運用活字ふり。故に體言いうけば。ふと相對へて
心得詞玉緒云上にをと係りずしてのでい將
べし。ふてて詞玉緒云上にをと係りずしてのでい將
然言運用活字ふり。故に體言いうけば。大田豊年云いくでさらでのでふ
りこれいいそべしてさらばしてふどいふ詞のずしの
せまりさるまてずの濁り。てにうつりてでとい濁るふ
り。ふで詞玉緒云此もいふんふどのふとも同屬ふり○
ひとつにて。去の轉じさるふり。てと相對てこ
にい變格活奈行の辞ふり。てくろうべし。さて續用言に
り受るいかくけばとくふよぬぬるぬれと活くと續體

言また體言より受るい活用ふさるり。○をい物とつゞ
ふいそするふをといふものはり。其意にて此物といひ
て其事につゞふ合せ。其事といひて此物につゞふ合す
る辞ふり。故に續體言まゝ體言ぞや何こそは辞よりも
はぐくふり。○へいふかといふに同格にて少異ふり。たと
へばゝちのくふもはうきつくゝふもはうも其ところさ
ゝて京より旅立する時。まゝい其道中にて云ときい。ゝ
ちのくへまろりけるく人に「つくゝへ」行とて。明石のうら
にて「むどいふふり。既に其所に至りていふ時い。住よゝ
ふまうでゝ「龍門に」まうでゝ「むどいふふり。ふきらと以

てふとへとの用ひやうとおるべし。「いせひ抄」に其所に
いまゞ至らびして。其かさとさして行意ふてといるふ
同じ。

ぢ

此ぢは數いるものゝ中ゝひとつときはめてさす辞ふ
て。ふほたその下と見合はべし。おもゝ辞ふるゞ故に。詞、
玉、緒ふぢはるると結べるうた多くして。んとそぬる類の
歌はおのづから多ゝらびて。又や何ふどい疑ふ辞ふるウ
ゑよ。おのぼゝらんとそぬるうた多くして。るとむすぶ
類はすくふし。共をおのづからよてきたるをのふて」と

いて。

や

共のやは數いるものゝ中のゝとつとうたゞひさす辞
ふて。此故に古くよて疑のやといひふへて。さてこの
辞のいさゝうかろきとかともいへて。詞、玉緒に「すべて
かはやに似たる辞にて。やと通はしいひてよゝ所も多
し。故に萬葉にはやといふべき所をかといへる類多し。
されど又かふらびやといふべき所と必かといふべき
所とたしゝふ分きたるも多し。みゞてにはつうひゞた
しといて。又ゞと濁る辞いてそれはのに通ふ辞ふれば。

此類よりならば續體言運用活字の下よりいへり。

疑

大小疑といへるは。詞玉緒よりにおどろぎたぐ
いろいろいろどいろでいづきいづらいついくおどの類。
皆てふをそれ結びみ格同ドれ故よ一つ小合せて何の
部とすといとまたるべきまして物事は分量とそうゆ
らまする。其ほどれ計ア難きより結辞の括をまつ辞ま
ア。さて此およおどたきいうでおどいふ辞と上よおさ
て。其下の結辞とのおうらよかもドとさむゲさだま
アよて。やもドいをさ〳〵とさまぬ大とおア。されどや

といふ格もはアて。おどそうふる定よアはアて。又何等の
下よやとそ〳〵ていふ格は。おどやおどやいうふどやい
うふきやおどおア。詞玉緒小「大うた何等は下いそふか
と受る例おるふ。右はぎくくおどとおどとは二つはそ。
やと受る例はアそれ中よおどはかと受るゲ多くして
やと受さうはいとすくおし。おどはやと受る例のそよ
てかと受ることもし」こはア。○又上小何等をおさて下
は結とは間ふきやとおく例はアをふるきやいうふき
やおどなア。詞玉緒よ「右のきやは皆上よたがいく何ふ
ばいふ辞とおさて。下とその結びよてとぢめたる中間

ふなりやもしとをかへてゐきば心得やすし」といふ。
○又おにるきやといひて語はさる〳〵格なり。詞玉緒ゑ
「右はきやハ皆上ゑ何おどいふ辞なりてやゑて切るゝ
おり。故ゑ下ハ何やは結ゑかゝならば。さてはのおゑれ
きやハおにるるぞおり。いろおきやハいろおるぞとい
ふ意おりとなり。○またや何何やと何の上ゑやとそへ。
何の下ゑやとそへていふ格なり。やと上ゑそへていふ
ハぬしやたきてるやいづこおどるゑやと下ゑつけ
ていふハおどやまゑおぞやおどいふたぐひ也○又何
は下ゑもとうくるなり。いづくもいくらもおどケう。詞

玉緒おもとうくるとれハ。其下は結ゑかゝならば」とい
それたるゞだとく。おゝてハもの意おもきふより。其
結もも徒の結びゑ屬れ。詞玉緒おへ凡ていくと云辞。初
學は輩ハ。こだりふいく千年。いく萬代おどゝいひて。た
ゞ多きこと久しれおとゝ心得たるハひゞ事おり。いく
ハ疑は辞おきば。たゞいく千代ぞと千代の數を問こと
ばおり。いく千代もといへども。ふて久しれ意おかるゑ
り。たとへばいく千代ゑほへ菊は花といひていハ。いくれ
辞うおハず。いく千世もおほへといへばよろしきおり。
すべて此けぢめとよくゑれまへて。ほうふべき辞おり」

とゐて。

こそ

たのこそいかぎてなく多うるものごとに中よて。すぐきておもれとれど一つえていざ〜。さ〜極て此其といふ辞おるとその反（ウラ）といふとの二つゐて。さてこそい今に俗言ふいふもおのづから雅言に格とゐやまたば。或人に説ふこそといふ意とたとへていもど。石と玉とひとつまどきると指（ニビ）さ〜てそれぞ玉ふるといひ。又手にひらへとてゐげて。たきこそ玉ふれといふほどに差（ケ）別ふて。ぞいひろくこそいせま〜と心得べ〜といへるふて。大うと心得らるゝやうふきど。さやうふのえふもひらび。せまれ辞うと思へびひろに辞ゐて。たもも古の辞とうまく形容〜て解示〜たる人ふ〜。さてこそいふそといひたるもゝふかて。こともふげふるやうふれど。立歸て。いちふる意ぞと尋ゑれば。今すこし心ふたらいぬやうふおぼえて。ひらめふいひとくことふらぬものふて。ふきふよて年ごろ意とはけて考へれば。こもそも二つふがらをのとさす辞ふて。こいふきそいそれまて。たの辞とかさ祢ていふふるべ〜とぞおもいるゝといへるぞ。實に千古の卓説ふる。たの意と得てれば。

六の辞と用ひたる。所悉く渙然として氷解せばといふ事なり。○さこそはもこそは。詞玉緒にさぞとおしてんと
る意とはもども物とはきやうかは。ものらは詞と上下
してさとさやうにはれ意にことをかしてこきばの心得らる
くかは。さもこそはさもく同じうはまさにもこそは詞
玉緒ふもこそは行末とおしてうはてはやぶむ意の辞
かは。ものの絲のこそと意かいきはとはは。かはれことをもか
く。こそは上にもはれそいきるかは。○さて反といふこそ
は。俗にサウコソイウタレ。サウコソ思ウタレといふこ
ろふ。はのさる辞かはとと知るべし。

結辞

むすび辞とは。上なる係辞かよはて其主意と立て指定めた
る事物は落成と言ふ辞にて。用言はさ運用活字は。絶定言。續
體言。既然言は三段にて。紐鏡ふる二轉三轉の辞どもこれふ
はて。さて此結辞は。神代よりいとも霊しく奇しくおごそかふ
定まる格にはて。いさこうもらぶはふ物すまじきを。古徹
ふよる事と懶ぐはて。或は自然のもはとし。或は助辞ふはた
ひて意にはづらはむど。麁忽に思い侮どはて古き例と探
索んものとも。思ひたらねぞ浅ましき。古人たちはその時世
ふ有はて。その俗言と用ひたきべこそ正しく調ひていはは

けき今よりい雅言といふぞうり沿革まうて有けきべ。いや
しげふる今は俗言の正しからぬ方より然いとんい。所謂拘
子定矩といふものゝて。つひゝはらぬすぢゝおちていふ
うひふきものゝはゝふりゆくめり。さてそれ調ひい詞玉緒
もて知り。それ意い古今集遠鏡ゝさはやひ抄ふどゝ依りて
明らむべきと。何くきと末書どもの多く出來て。中くゝ惑ハ
しげふるかより。鈴屋大人は遠鏡小照し見て。高山は峰の梢
の雲と凌ぎて。目も及びがてふる言の葉と今は世のことバ
ふ味く譯し得つるかより。ふは人くはとも。折衷して一つは
圖とバつくきり。そい同書ゝ。初學ふどは爲ゝい。註釋ハいろ

ふ委しく解きたるも。物の味ひと甘し辛しと。人は語るを聞
たらんやうふて。語の勢ひ辞の活用ふど。微細ふる趣ゝ至と
てい。猶たしろふいえはら孫バ。其事と今ふはぢ思ふぢ如く
い。悟り得がゝれ物ふると。俗言ゝ譯したるいたぢふゝづう
らさ思ふゝ等しくしそ物の味ひとゝづうらふめて知きる
ぢふとく。古は雅言ゝふ己ぢ腹の内の物とし成きくバ。一う
さはふまろふる心ぢへのたしうふ得らるゝことふはきぞ
ろし。とはるふよきり。さて此圖はるやう八段ゝものして
その第一段い諸の結辞どもは名目ふて。其用言と志るせる
い上ふる用言ふて。某屬と志るせるい運用活字ふて。某行と

志るせるハ。それ結辞の意と得て目標によりてさる字ふて無活用辞と志るせるハ。轉て用く事ふき辞どもふて。この故に紐鏡にハ載られずて詞玉緒にのミ出されさて。○第二段。第三段第四段ハ結辞ふて。その第二段ハ絶定言紐鏡にて行にても徒の結辞ふて第三段ハ續體言ふて紐鏡にてハ。中行にて第四段ハ既然言ふて紐鏡にてハ左行ふるこそのむすびふて　そのや何の結辞ふて　さて其屬辞受辞無活用辞ふどの傍に一二三四五或ハ體と志るせるハ。その辞を受さる體用ハ言の目標ふて。一ハ将然言。二ハ續用言。三ハ絶定言。四ハ續體言五ハ既然言體ハ體言よりてふること。運用活字圖に合せ見て志るべし。○第五段ハその結辞どもの譯ふてそ

ハ中ハ将然ウ續用タふど有るハ。その行の用言と譯辞の上にすゑ下へまハして。心得しめんとて物したるふて。○第六段第七段第八段ハ。係辞と結辞とその本末の打合ひに依て其いきやひよりて出さる言外の餘韻ふて。譬へて四段用言ハ結辞ともて一例と言ハゞ古今十九秋風に。はころびぬらし。藤袴つゞりさせてふ。蛍ふく　るふて。こそ　の時ハ。ふけと音の轉譯ハかくらば　暮るるのミにて。其同三暮るるふうと。見もゞ明ぬる。夏の夜と。飽のずとや　ふく　山郭公こきまいやの係辞とふて　後撰四秋萩の咲くにしもるど。鹿ハ　なく　ぶとさのひゞきふて　つろふ花ハ。おのゞ妻うもれハ疑の辞上にふて。むすぶとさのひゞきふて　ふど。同じふくといふ辞ふゞら係辞

のさゝまかよをて。結ぶところ別まるをて。その意味の大ふかをる事なを。心と平うにゝて考ふべゝ。因まいふ此圖まいらいせるい。その正格なるゞ此三段の結びのさだまをと離きて變格といふものいなを。詞玉緒二巻ふ。其例をいざされて云く。上よぞのや何等の辞をおろゞゝてぬるつるるけるせるるゝぬ不ゝ過去などこ結びて。其格まそづきふゞら。てにをはとゝのそびといい聞えぬと。變格とるづく。といるまてよく思へゞ。かな或いよといふ辞をいひれこゝて。とゞめたるなをけを。何きも下ま歎息け意の。含まをたるなきべ。その意ゝて見るべきなを。まさ上ま疑の辞をおきて。下まてをと

結ひたるわを。後撰戀ゝきも思ひこめつゝ有るものと人まる我ゞそでと秋の紅葉といふ絶定言まて。問ゝくる方なるもゝ名ま。下ふまま又やと添てきく。又つぬと結べるもいを。金葉夏の夜の月待つ程の手意ふを。ずさびま岩もる清水いく結びゝゝまと淡路嶋。通ふ千鳥の啼く聲ま。いく夜ゝざめぬ須磨の關守ふど有を。こきらハ運用活字ふる。竟行往行ま限をたる事ゝてるべ。ての例まいらず。こきらをおきて外まハ見いさらゞ。さて古歌けうちまも。稀まいいと耳だちて聞ぐるゝれも多ゝを。こきらい古人と雖も。その一首ま中まをさゝを難きと。強ちま言い取らんとせるまを出來困ゞたるとを。れ事なきゞ。今そきふらひまをんい。いゞきひゞ事ふを。いく度も常の正ゝきとよく守をてこそ。ものすべきまゝざなき。

上層なる係辭の段々其結辭の至格を知り明らめ下層なる係辭と見合せて其言外を餘韻とふべし

四段用言	絶定言	續體言	既然言	係辭譯圖							
係辭（ぞ）（こそ）（なん）	係辭（ず）（き）（ぬ）	係辭（べし）		徒	ろ	は	も
く	す	つ	ふ	む	る	き	に	ひ	み	い	ぬ
る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る	る
け	せ	て	へ	め	れ	き	に	ひ	み	い	ぬ
れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ	れ
ク	ス	ツ	フ	ム	ル	キ	ニ	ヒ	ミ	イ	井
ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル	ル

係辭譯圖											
徒	ろ	は	も								
なに（ナニシニ ナニノタメニ）	ちど（ナセ ナセニ）	や（カ）	ろ（ヤ）								
たゞ（タレノ）	いく（ナニホウ イクラ）	いつ（ナン時 イツホト）	たれ（タレノ タレニヨ タレカハ）								
いづく（ドウカ ドコヘア）	いつて（ドウシテ ドウシテ）	いづく（ドタイ式 何ニヨル）	いろ（ドノヤウニ）								
いづら（ドコヲ ドチラ）	いづも（ドレ ドチラ）	いづち（ドチヘ）	ころ（ガコレン ナニヨリ為）								

一段用言	中二段用言	下二段用言
く	く	く
つ	つ	つ
ふ	ふ	ふ
む	む	む
ゆ	ゆ	ゆ
る	る	る
う	う	う
す	す	す
つ	つ	つ
ぬ	ぬ	ぬ
ふ	ふ	ふ
む	む	む
ゆ	ゆ	ゆ
る	る	る
う	う	う
く	く	く
す	す	す
つ	つ	つ
ぬ	ぬ	ぬ
ふ	ふ	ふ
む	む	む
ゆ	ゆ	ゆ
る	る	る
う	う	う
キ ル	キ ル	キ ル
ニ ル	ニ ル	ニ ル
ヒ ル	ヒ ル	ヒ ル
ミ ル	ミ ル	ミ ル
イ ル	イ ル	イ ル
リ ル	リ ル	リ ル
井 ル	井 ル	井 ル
ワ イ		
ノデアラウカ		
ノデアラウジ		

變格用言	く	くる	くれ	クル	
	す	する	すれ	スル	
	ぬ	ぬる	ぬれ	ヌル	
	り	る	れ	ル	
形狀用言	〜	き	けれ	イ	
	〜	〜さ	志けれ	シイ	
	け〜	けさ	けれ	カナイヤウナ	
下二佐屬 一	す	する	すれ	セル	
	さす	さする	さすれ	サセル	
下二良屬 一	る	る〜	るれ	レル	
	らる	らる〜	らるれ	ラレル	
受辭竟行 二	つ	つる	つれ	タミニカニシツカリリクツナニ 續用	
同 往行 二	ぬ	ぬる	ぬれ	ヒトウトニト 續用	
同 可行 三	べ〜	べき	べけれ	續用 テシマウ 續用 サウナ 續体 ハズイカヨイ	
同 不可行 三	まじ	まじき	まじけれ	マイ	
同 不行 一	ず	ぬ	ね	ヌ	

						ワイ
					ず	ころ
					は	も 徒
ノデアラウカ	や					
ノデアラウゾ	疑					

變格良屬						
	けせて へめれり	かて	しかり	けろ		
	けせて へめれる	かる	しかる	けろる		
	けせて へめれれ	かれ	しかれ	けろれ		
	續用テアル	ウアル	シウアル	カナイヤウナ		
受辭不有行 一	ざて	ざる	ざれ	ズニアル ズニ井ル		
同 而有行 二	たて	たる	たれ	テアル テ井ル		
同 止有行 体	たて	たる	たれ	トアル		
同 來有行 三	けて	ける	けれ	テキタ タ		
同 見有行 三	めて	める	めれ	トミエタ トミエタ		
同 也行 三	ふて	ふる	ふれ	アレ 續体		
同 爾有行 四 体	ふて	ふる	ふれ	ニテアル ナヤ		
同 爲有行 体	せて	せる	せれ	ヲシテアル ヲシレタ		
同 既行 二	き	志	志ら	タコデアルタ		
同 竟既行 二	てき	てる	てら	タシカニシツカリリクツナニ 續用 ヒトウトニト 續用 テシマウ 續用		
同 往既行 二	にき	にる	にら			

						ワイ
					ず	ころ モノヲ
					は	も 徒
デアラウカ	や					
デアラウゾ	疑					

受辞將行	一 ん	ん	め	ウ		
同將竟行	二 てん	てん	てめ	タレカニ リケリ リタリキ ヒトウ トント 將然 續用テモハ	はも徒 ぞころ	
同將往行	二 むん	むん	ふめ			
同將有行	三 らん	らん	らめ	ノ テアラウ	や	
同將既行	二 けん	けん	けめ	タノデアラウ タノ	疑	
同將爲行	一 ま～	ま～	まか	ウ		
無活用辞 一	ど	○	○	ズアラウ 續用ハズイ		
無活用辞 三	ら～	ら～	ら～	サウナ		
無活用辞 二	けら～	けら～	けら～	デキタサウナ タサウナ	はも徒 ぞころ ワイ	
無活用辞 四	むら～	むら～	むら～	ニテアルサウナ ギヤサウナ		
無活用辞 二	つ～	○	○	ヒタスル 續用テ		
無活用辞 体四	かむ	○	○	續体 コヨカア 体言 ナルコ	はも徒	

ト思フワイ

カト思フワイ

ゾト思フワイ

上マア思フワイ

カ上ア思フワイ

ゾト上ア思フワイ

上マア思フモノヲ

上ア思フモノヲ

右の圖よりらそせる。四段用言一段用言ハ雅俗ともふ。その唱へ同じけれども。譯(ウツ)に辞(ことば)ふし。中二段用言。下二段用言ハ譯辞にて。變格用言も本行のまゝふて。

○形狀言よハ。よさらし～さそるけさとやうふ結(ムス)ぶ一格あて體言ハ。のよてうけて結び。用言の方ハがよて受て。むすぶ定まてもり。

○下二段活佐行の屬ふる。すするすれさすさするさすれハ。もろ～の活言の下二段活良行と相ふらび受けて。他(ヒト)をして然せさする辞ふて。自他活言の下ふ。ハいハせ考ふべし。

○下二段活良行の屬ふる。るる～るるきらるる～らるるきハ。

もろ〳〵の活言は將然言よゑ。下二段活佐行と相ふらび受けて他よゑ然せらるゝ辞ふゑ。自他活言は下ふゐゑせ考ふべし。

○受辞。竟行のつつるつきい。下二段活多行の屬よて。續用言よゑ受る辞ふゑ。さて此つい竟の義るい有の義よて。竟有のこゝろふるべし。故よぬぬるぬきと相ふらびて。えづらふ〳〵る物事は終ゑをかさる辞ふゑ。ゐもひ抄よ。たとへば紙よ物と書きつけさるやうふふゐよざと爲竟てもふゐその物とあるとたてくいふ辞ふゑといへゑ。

○受辞。往行のぬぬるぬきい。變格活奈行の屬よて。續用言よゑ受る辞ふゑ。さて此ぬい往の義るい有の義よて往有のこゝろふるべし。故よつはるつきと相ふらびうけて。おのづらふきることはをいゑとかさる辞ふゑ。ゐもひ抄よ。さいゐゑ難からんとおぼゆる事のをいゑふゑさるやうは意ふゑとゐゑ。

○受辞。可行のべしべきべけきば。形狀言久活の屬よて。絶定言よゑ受る辞ふゑ。ゐもひ抄よ。其勢ひと知るふかくゐゑてよりほどなゑと量ゑ定めていふ辞ふゑとゐゑ。

○受辞。不可行のまじまじけまじけきば。可行の反對よて形狀言志久活の屬ふゑ。ゐもひ抄よ。萬葉の古點よ。不可顯とゑ

ラハルマジキとよませたるも。此故なり」とあり。これも形状言なり。

○受辞不行のずぬねのずは爲(ス)は反對ぬは否(ヌ)の義ねはでは同じくて。無の義にて（古書に。ナニヌネノ言を。ダヂヅデドといへる例多し。）とも小然有(シカアル)べきことは然有(シカアラ)らぬが。如此(カクノゴト)く活用(ハタラ)けるなり。これも形状言なり。

○變格活良行の屬なる。けせてへめれより。りるれと受るは。四段活の既然言はうつりて。形状言となりたるにて。飽有(アテリ)押有(オセリ)打有(ウテリ)逢有(アヘリ)住有(スメリ)釣有(ツレリ)のこゝろなり。こゝはけりせりめりなど。運用活字なるとは異なり。これも形状言なり。

○同屬なる。かりかるかれしかりしかるしかれけかりけかるけかれは。形状言の將然言は（く活の本語）よりなり。變格活良行にわたりて。活用(ハタラ)ける辭なり。この故によかりはよくあり。あしかりはあしくあり。そるけかりはそるけくありのこゝろなるを。その用急なるによりておのづから辭のせまれるなり。これも形状言なり。

○受辞。不有(ザリ)行のざりざるざれは。將然言よりうくるずより變格活良行にわたりてぞありのこゝろなるを。その用急なるによりて。おのづからことばのせまれるなり。これも形状言なり。

○受辞來有行のけてけるけきい續用言よてきてと受さるが。變格、良行よわさてて。きてゐての義ゐると。その用急ゐるよて。おのづゐら詞のせまきるよてものと了解することばゐて。故よ言語四種論よい事れ狀と定めそうるゐてとゐて。因ゐいふ紐鏡の第十三段ゐるけてけるけきい四段活よて轉きるよてこきといい異ゐて。思ひ混ふることゐられ。ものも形狀言ゐて。

○受辞。見有行のめてめるめれい。下二段、活夜行のええといふ辞よて。變格、活良行よわさてて。えゐてれ義ゐると。その用急ゐるよて。おのづゐらことばのせまきるゐて。さて此辞ええゐての引合ゐきと。眼〳〵て見るふ限らば心よおもひ慮て然ゐらんと。大ゐさふ推量て定むるともいふ辞よて。ものも形狀言ゐて。

○受辞。也行のゐてゐるゐきい所謂末ゐてゐり古今集遠鏡よ「春くきば雁かへるゐて」「人まつむ〳〵れ出をすゐて」ゐどのゐてい。ゐるゐさゐる事と出ゐさよて見きくていふ詞ゐて」とゐて。尚絶定言運用活字は下ふいへるともゐもせ考ふべ〳〵ものも形狀言ゐて。

○受辞爾在行のゐてゐるゐきい。續體言よて受る辞のによて。變格、活良行よとれて。ゐゐてれ義ゐると。その用急ゐる

ふよう。おのづから詞のせさまるようてがをかいへることと解釋するところ〳〵ふう。ふは續體言運用活字は下よることきるごとし。ふもも形狀言ふう。

○受辞。爲有行のせうせるせまい。何〳〵てといふ辞の變格活良行ようさうて。ふてはうは義ふると。その用急ふるふよう。おのづからことバのせまきるふうこもも形狀言ふう。

○受辞。既行のさ〳〵ふろい。はゆひ抄よ過さる事をたしらふ定めていふ詞ふう。但人よ對ひていふことバよて。たさ〳〵ひとうごとよいふとも。をづからとひをづからこたふるはどの心ふう」とはう。或説よきい既の義。しい去の義。しい上

れ二つとはこせさるふうといへう。こもも形狀言ふう。

○受辞。竟既行のてきて〳〵てしらい。下二段活多行の續用言ふるてよう運用活字れさ〳〵ふろふうつうはさらけるよてその義とはいはせておもふよてきい竟既。てしい竟去てしら。竟去既ふるべ〳〵。さて此辞受るところふきと同じさまに。相ちらび對ひてをづからふす事れをいうをいふ辞ふること。上ふる受辞竟行の下よい〳〵るゞ如し。ふもも形狀言ふう。

○受辞。往既行のにきふ〳〵ふしらい。變格活奈行の續用言ふるふよう運用活字のさ〳〵ふろふうつうをたらけるよて。それ義とはいはせておもふよふきい去既。ふしい往去。ふしらい

往去既なるべし。さて此辭受るところ。できとゝ同じく相ふらび對ひて。おのづからなるをつることのをいをといふ辭なること上なる受辭。往行の下まいへるごとし。たゞも形狀言なり。

○受辭。將行のんめハいもひ抄ま「未」然らぬ事を量をいらましていふ詞なり。をづから思立て。いまもうんいざかへらんといふハ裏なをとゐらんかゝらんなどいふハ表なをなり。今より後を量り此處より彼處をそうまる意なり。此義を思ひて萬葉まハ將字をかけりとなり。

○受辭。將竟行のてんてめハ。下二段活多行の將然言。てより

んと受さるゞ活用けるなり。ゐもび抄ふて「てといふ詞の意たとへバ紙ま物を書つけさるやうまなれまざを爲てゝ後も。猶そのゐとあるとたてゝいふ詞なり。とゐるか上なる將をゐのハせてその意を知るべし。さてんハ右のごとく將竟ま義なる小より。ふんまを對ひて願ふ意なると。心の中まを祈ひて問かくると。二やうまいへる詞なり。

○受辭。將往行のふんなめハ變格活奈行の將然言。ふより。んと受さるゞ。將をかりて活用けるなり。さて此ふんまハ二種ゐり。それ一ハ祈ゞふ意なる。將然言まり。ゐうふんなさふんふその一ハ未の事をおしたかりておもひやるなり。詞玉緒ま

小常はかんといへるはきかを。續用言よりはさかんかしかを段活はていはらかんはらさかんとうくるこもかを。さて四段活中二段活下二段活はてはこの異はうるはと。一も上よりいひ下れことの意と考ふきば。其處〻はてかのづらはうも知るはかを。此辞てん小相對へる辞かを。

○受辞。將有行のらんらめはい變格活良行の將然言らはを將活とかをて活用けるかを。さて此らんはうたがひてかもいやる詞かを。故はいづきも見えたるものと。かくきさることををとと合せてよめを。細ろかいそぐ人と見て心を知ると。木と見て花とかもふと。草と見てた祢をうたがふとのこつはを。さてらんは人ともうけ心ともうけて結辞かを。人ともこころとはらはしてよめるもはを。かさつろさと省さてよめるもはを

○受辞。將既行のけんけめは。續用言運用活字將然言。けよを將活とかをて活用けるかを。さて此けんのけは。既の義かを。と。或人のいへる如く。すぎたる事とたしろかいふことばかるがそきかんのそはをて過去をうたがひてかしそろることとばかを。

○受辞。將爲行のましましろは將の一種はて。その譯もウとこころ得てたがふ事かしさて漢文は將字とまさかとよこつけて。又云云爲んと爲と。同言の爲と再いへると同トさま

まて。必まーまーらと結ぶ辞の上ゑ爲者といふ言のいる例ふ。古今世の中ゑ。たえて櫻の。おろゑせば春の心いのとさけらら如ふど例證牧舉しがさし。詞玉緒ふくいーて此まーの言の意い將爲ふるべーと。いる人のいへるぞよき。

○ーいすでゑ運用活字の下ゑいへゑ。さて此辞も徒のゑ社結びゑて。ろや疑こその係辞ゑてむすべる例ふし。丈まよゑ下の結辞。紐鏡ゑハ出されず。そいいづもの辞も上の如く。轉ずることふけまバふゑ。されど詞玉緒ゑハ例證といはさあげて丈とゑられさゑ。

○らーハあゆひ抄ふらんよゑハたーらふ見さだめふぐら。こゝろふちゐね辞ふゑ」。といふゑ。いる人云古くや疑ゑて結べる例もいまど。そいいらーらとおもふよーあゑ。いうふとふまバ。俗言ゑうつーて見まバ。サウナといふゑいはさる辞ふまハふゑとい一ゑ。その當否ハいうふいるらん未考へ糸ども。いうふもそも徒ぞこうのゑ結ひとふまるぐいと多くーて。や疑ゑて結べるハいと稀ゑ見ゆめまバ。丈の圖ゑハ略け。詞玉緒ゑ云く。いらーふらーからーふらーからーふどの類。丈まもいらんふらんからんのんと活用うーてーといへるふまハ常のらーと同ぐきぐおとくふまども。常のらーハ上の言と離て一つの辞ふると。上の言と離てたゑとハ。譬へバ行くらーふ散るらーふどいふ行

く散るの言とらしといふまさるといふ此らしはらはふ。○重亂云く此ハ絶定言よりて受る正格ふて。上の言ふ附たまばからしはけあらハいりともあるともさのらハ。活くことふしら云もらしハふいらしのつゝまりたるまて。寒からしハくあらしのつぐまりたるまて。寒からしハ

く有らしふて。深らしハ深く有らしふて。さる故まおらしもからしもからしも同ト例ふるまて。○重亂云く此三つハとまる。變格活良行の將然言よりてうくいさゝう異ふてされるのまるてまるべての事まハあらば。

どてまをハのとゝのへの格ハまふ常のらしまる同ふ」といふて。

○けらしハ。詞玉緒まる。こまハけりてけるけまの活さたるまて

らりてるれの活さハ。○重亂云く變格活良行といふて。右のいらしふどの格

と同ゞけまども。下のしハこれのまんと活く事ふし。然まバ

本まりらしとハ別ふる辭ふて」とふるされまて。ふは續用言

運用活字は下まハへて。合せ考ふべし。

○ふらしハふあらしの引合ふることらしの下まハへるゞ

ゞとく。變格活良行の將然言ふる。らまりらしとつゞけさる辭

ふて。

○つゝハ。詞玉緒まて小通ふつゝと下まる意と含めて言ひす

るつゝとの二種いて。さてそのて小通ふつゝハ。ゐもひ抄

ふ。中のつゝといへることまて（古今物毎まる。秋ぞ悲しき。紅葉つゝ。移ろひ行くと。限りと思へゞ。同山里ハ。秋こそことふ。まびしけき。鹿のふく別ふて。紅まる。目をさましつゝふどらるたぐひといへて。

くふいげさるハ。所謂下まる意と含めて。言ひすつるつゝまて。

いもいハ抄まる末のつゝといへるといへて。故まる上へかへらば。

いひすてたる隨ニて。言外ニ含畜せる意味ありる也。いひ下し
たる事の意を得てさとるべし。

○かふい。運用活字は下ニ言へるが如く。もとかといふ詠め
たとばふ。ふとももとも歎きたる辞をそへたるなり。ふるく
いかもとのこいへ。さてそのかなと濁りてがながもと
とぢむる辞なり。詞玉緒ニ。おほよそもがもとつづくときは。
すべてがと濁りて願ふ意の辞なり。古今かくしつゝとふも
八千代ニ。逢ふてしがふは。こふ濁りて願ふこゝろなり。拾遺
よしもがな。かくふも。長らへて。君が
の。月のうつらも。折るぞうれ。志がな。金葉秋ふらて。妻呼ぶ鹿方
家の風とぞ。ぶうせてしがふ。とさしらふをうら
聲の。身ニいふしがふふも。がと濁りて祈がふ意なるなり。赤
志むうと。

衛門集「こやこ出て。今日九日ニふり
ニけり。とうろの末ニ。至りふしがふ」もがこまい常のかなと
かとのこもいふ如く。願ふこゝろのがなと。かとのこいへる
なり。もがふニ同じ。古今「心がへ。する物ニも
がふ。片戀は。苦しきものと。人ニ志らせん。志ぶ
がふ嶺と。さやふも見しが。けいきてしがふニ同じ。後撰
ふく。横ふり伏せる。さやの中山」てしがふ「とうくて。此ぬるよ
り。稲妻の。光の間ふも。君と見てしが。ふしがふニ同じ。後撰「伊勢の海ニ。
ふしがふそぶ海人とも。ふりふしが。浪う
き分て。見るもがも。まさ萬葉ニはてしがもといへるもあり。
目かづらん。もがもや。古今「甲斐が嶺と。ふごし山ごしぶく風と。
人ふもがもや。こふ大凡ふ意のがふも同じ。はかふら
と傳てやらん。ふ意のがふも同じ。はかふら
ばもがふしがふ。てしがふ。ふしがふ。
ふしがふ」といふ限る事ニて。其外は例
ふ」とは。此は圖ニは出さ孫ども。一つの結辞ふきバ因ニ
いふのこ。

○受辞而有行のたゞたるたまい續用言運用活字ふる。てよゞ變格活良行ふゞさゞて。てはゞの義ふると。それ用急ふるふよゞ。おのづらふとばのふまるふゞ。これも形狀言ふゞ。

○受辞止有行のたゞたるたまい。體言運用活字ふる。とよゞ變格活良行ふゞたゞてとはゞの義ふると。その用急ふるふよゞ。おのづらふとぞのせまれるふゞ。これも形狀言ふゞ。

さてこの而有止有の二行ともふ。上ふる不有の下來有の上よりるべきと。記さもらせるゆゑよゝふはげさゞ。

留よゞ上へかへる辞

詞玉緒ふ云く。「すべてさをいは辞ゝて。留ゞて上へかへる歌ハ。何ともゝふ其留ゞをいてふをハの。必ゞ上のことばの切るゝ所までへ。かゝるやうふよむことふゞ云云然るふ後世よハ此格と知らで。留ゞをいてふをはの或ハ初句は詞ふどへのゝ係ゞて。其ふとばのきるゝ所までへハかゝらぬ歌の多きハゝふひゞ事ふゞ。そゞめは詞へハかゝらぬも難ふはらず。たゞきるゝとふろまでへかゝらざれバ。一首の趣とゝのをびと知るべ」。とはゞてその證例を舉られさゞ。さてその「よそふのゝ戀や渡らん白山のばとまゞふはる辞のハ古今ゆさ見うぐくもはらぬとゞ身」

古今のこゝに無く散るぞめでたき櫻も拾遺くまびとく行て
花はゝてせの中そてのうけまゝ古今たましらへらむ逢ふことの
十市の里の住を古今もとめて折つる白くに花の
うゝしゝ　もの立かくすらん山のさくらと
色いうつゝふけゝふ徳よ我ゞて古今此里かたび寢ぬつべ
身世ふるふゞめせしまに　さくら花ちゝのまゞひ
小家路で古今いゝしゝへるおほ立ゝる心ゝ古今かゞゝ
忘まで　むゝいしゝきごとふものわすれせで　と山いざ立ゝ
ゝて見て行む年へぬと　身ハ老やしぬると　古今月見ればちゞゝ物こそ悲しけ
ども　新古今君ゞ代ハ限もなしらじ長濱ども　後撰そゝま千鳥ゝけゝつ
れ濱の真砂ハよゝつくにとも　ひゝゝけゝつ
も無き人のゝゝさゝべく　古今山ゝぜよ櫻ふきまれゝざも
ハ啼きわさまど　ふん花のまぎれよ君とまるべく
まで拾遺忍ぶまどいろよ出よけゝわゞ　古今ふゝ分
戀ハものやおもふと人の問ふまで　ものゝら　古今ゝはとゝぎれ汝ゞ啼ゝや
問ハんもゝぢ葉のふゝかも　く里のゝまさあれバゝ
くしてし道と見ゝゞら　ほうとまれぬ　思ふものゝ　古今秋ゝふらで逢ふ事かさゝ女郎花天の川原よおひぬ物ゝ
思ふものゝら　ものゝ

古今別まとい山のさくらゝまゝせ
てんとめんとめゞい花のまに〳〵　もどるてゝは此外
ゝも例おほゝろべし。

重ふる辞の格

詞玉緒ニ云く「そもとぞのや何ゝそと重ふる事ハ孫よ多し
その時そもい輕く。そのや何ハ重き故よおもき方ハ格よて
むすぶゝとゝゝ。それ一例といそぐは古今ゝく山のもゝ
ゝ聲きく時ぞも古今人と思ふ心木の葉よ有らバ
秋ゝろゝし　こそかぜのまにく散ゝも乱まめ　かくゝ如
くゝゝ。餘ハ大ゝゝ准らへて心得べし。○同書ニ二重よとく
ゝふる辞ゝゝ。そとやとぞと何とぞとゝろとやと何とこそ
とやとゝどるゝ。その一例といそぐ。そとや後撰ゝのくめよ飽ゝで別ました

もとと（そ）つゆや別けぞと何拾遺祈アと（そ）いろ（ら）ん（と）ハ思
し（と）人のとぶ（むる）いき来川いきて別るく世ユこそ
ハ（ア）ぞと（ハ）そきて時（こそ）有（れ）とさやけ（ろア）（ける）
けき新葉六（ろ）げ氷る霜夜の月（そ）秋とお、やと何古
今（ろ）けげたき人のすげさふ（ろ）びたそとや中務集花と（こ）
出てこアずや（たも）も又しづむ（べき）（ろ）人（や）と（る）と
てとぶめ（しろ）かずふらきられ外ユおほはなまた有るべし。
ぬ身をいろよかをせん」ユ
如此く二重ふむすべる辞ハかさおアたる方と。とゝうけて
下ふつゞくる例おア。

本歌ユゆづる格

詞玉緒ユ云く「ふきハや何の辞をおきて。それ結辞とバ本歌
ふもづアてとぶける格おア。」新古今「梅ハ花たゞ袖觸きゝ匂
ひぞと春（ろ）むろ〜の月ユ問ハぞや。同面影ハ霞める月ぞや

どアける春（ろ）むろ〜ハ袖のもをだ」ユ。此二首ハ古今おる。月
ハ春ふらぬ我ゞ身ひとつハ本の身かして」といふ本歌の一
首のこゝろと春やむろ〜といふことバユ成て。のと受さ
アハもじ〜ユて。そのこゝろハらハきさア。さてやの同君ゞ代
むすびとも本歌ユもづアてとぶけるものおア。
ふのいずハ何と玉の緒の。長くとまでハ惜まれど身と」これハ古
今戀一。かさ糸と云ふさかおさユよアうけてのハずハ何と
玉の緒ユせん。といふと本歌ユて。君ゞ代ユのいずハ何と玉
ハ緒ユせん。その玉緒の長くとまでハ惜まるまじ身おる
ものと。といふこゝろおア。これも何のむすびとバ本歌ユゆ
づアて。本歌のことバのこゝろをふく。右のごとく本歌ユも
めて。のと受けさること上ユおおし。
づまる格ハその本歌を知らでハ。辞ハこゝろ得がたるべく。
又いまおぼろけハ人ハよむべき物おもならぬ。よくせぬ
心得がたきえせ歌ユおアをんうしとなア。

動らぬ言まて結ぶ格

詞玉緒ふ。うごらぬ言まて結ぶ格とて出されまて。またハ體言どめともいふあて。此ハそも徒まても。ぞや疑まても。こそまても皆とまて。趣意落著するあて。そハ何故ま體言まて留るぞとあ〜たづねもバ。皆其體言ま下ま丈とバまこて。其のこて。たる詞まて留るあてけり。それ殘る丈とバといふハ。は古今青柳と片糸によて鶯のぬふてふ笠ハ梅の花ガさ。これハぬふてふ笠ハ梅の花笠あてといふことまて花笠まれ下まあてといふ辞と加へてもろ〜て後まとまるあて。も續古今明石潟ゑ〜ゃきとかけて見渡せバ霞のうへも沖つ白浪。これもあてのことまこて。徒これハうミあるばもの格とすのまこてたるあて。体言留の下ま辞

とそふろハ。同〜格あて。ぞ後撰。ひたぶるま思ひあわびぞふるさるし人まこ〜ろいろもそ世の常。これハあるの辞の殘てたるあて。や古今。谷風ま解ふる氷のひまごと小打出る浪や春の初花。これもあるのことまこて。疑新古今。岩根ふゑ重ふる山と分け捨て花もいく重のいろまこて。白雲。これもあるまこてのことバまこて。たるあて。ま新勅撰。よひ來〜夢路のやゑと出ぬゑバ色こそ春の墨染の袖。こゑハあゑものことバまこて。たるあて。ま丈ゑらまこうこいづゑもその體言ふてとまてさる下ま。含畜せる意ふて。はも徒の係辞ま時ハあての辞の省ゑてさるあて。ぞや疑の係辞の時ハ。あるの辞のことぶゑてさるあてこ。その係辞の時ハ。あれの辞のことぶゑてさるあれバ。いづゑも

紐鏡まと用言ふゐはいせて。もてゐるれの辞と。補ひ加へたる心もちひまてとぢむるゐてとゐるべし。

いひかけまて結ぶ格

詞、玉、緒ゐ。此一例と出されとて其ハはも。徒のをい有ることふし。ぞや疑こそゐどいづれの係辞まてもひゐけて下れ體言ゐゐいせさるぞ。その係辞ゐよて結ぶ上ゐの意味も大まかいる事ゐて。たとへバは新古今世の中とそむれまとてい來しゐどもゐほうれ事ハおほ原の里これいもの係辞ゐるもゐおほしと結ぶ格ゐも後撰。夫もやると地名の大原の里まいひゐけさるゐて。このゆくもかへるも別きつゝ知るも知らぬもいふ坂の關

これいもの係辞ゐるもゐまいひゐけさるゐて。ぞ千載。雪ゐらばゐると。地名まいゐふ坂まいひゐけさるゐて。ぞ千載。雪ゐらば

ま垣ゐのをいつもらゝと思ひとくゐぞもらぎくれ花。これハ別まと係辞ゐる故まもらるまとむすぶ格ゐ。ぞもらぎくれ花ゐいひゐけさるゐて。や後拾遺。いぢきゐるとゐ。もらざくれ花ゐいひゐけさるゐて。や後拾遺。いぢきゐく思ひこゐやれつきゝと獨て やゐでの山吹の花。これハやの係辞ゐるゆゐまゐると結ぶ格ゐる。地名のゐでまいひゐけさるゐて。疑金葉 いゐぞゐて神もうれゝとを笠山二葉まと松の千代まけゝれと。これハ上まと疑の辞ゐる故ま。ゐると結ぶ格ゐると。地名のこゐ新古今。さ夜千鳥ゐ。ゐこそゐゐまいゐけさるゐ也。近くゐる海ぢさかさゐく月ゐ潮やをつらん。これハこゐのゐかまとむすぶ格ゐると。地名のゐかまとゐ係辞ゐるもゐのゐるをゐいひゐけさるゐて。むすぶ格の用言と。その下ゐる言いひゐけさるものゐて。

○右ハ結辞ニ屬(ツ)けるもろ〳〵の定格(サダメ)と記せるなり。さて上ハかくゝごとくうけさるハ。はらゆる結辞のかぎりなるものからそれと見なぎらしづらら用(モチ)ひんとするハ甚(イミ)ゝ強(シヒ)事なるべし。歌ハされ文ニよれ作意ハ。各隔なるものなれば。なめ〳〵つらひなれさる辞(ニテヲハ)ばかり三つ四つまハ過ざるものなり。それ語勢ハひられ。その辞のよりくるハ隨ひ。その旨趣ハ相叶へくものすべきわざなり。